

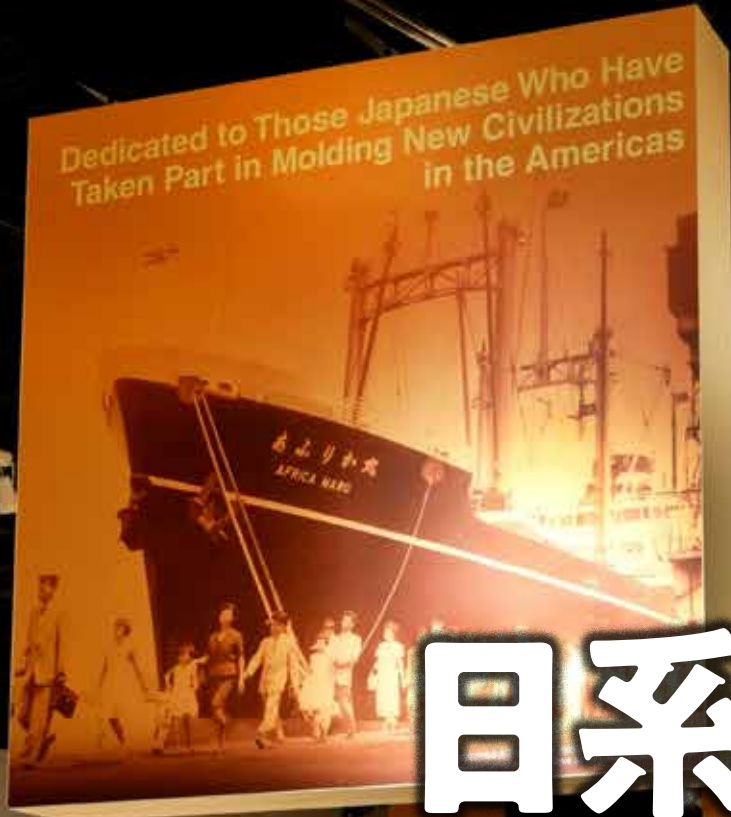
mundi



The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

10

[ムンディ] No. 85
October 2020



特集

中南米

日系社会と ともに歩む



Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 24
- 04 特集 中南米
日系社会とともに歩む
 - 06 中南米を知る
 - 歴史を紡ぐ中南米と日本
 - 08 1世が開拓した農場を4世が守り、次世代へ 멕시코
 - 10 移民の歴史を未来に伝える ブラジル
 - 日系社会と深まる交流
 - 12 高齢者ケアの最前線で活躍 パラグアイ/ブラジル
 - 14 日系病院の連携で社会全体の医療の質を上げる ブラジル
 - 中南米と手を携えて
 - 16 防災ネットワークの拠点に チリ
 - 18 三つのステップで貧困から“卒業” ホンジュラス
 - 20 ウェブで広がる学び合い
 - 22 旅人・たかのてるこさんの中南米★写真紀行
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 23
グアテマラ
- 26 世界につながる教室⑫
映像の力で、興味を引き出す
- 28 地球ギャラリー Vol.145 ウズベキスタン共和国
写真・文●鈴木 革(写真家)
歴史ある“若者の国”
- 34 教えて! 外務省
知っておきたい国際協力⑳
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 読者の声、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.25

*掲載されている情報等は取材当時のものです。



中南米を中心とした日本の移住の歴史と日系人の今を学べるJICA横浜 海外移住資料館(写真:小西威史)。



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

プロローグ Vol.24

日系、 そしてその先に

文・セルジオ越後

私は日系ブラジル人2世としてサンパウロで生まれ育ちました。日本からの移民はその頃、サンパウロと同州に隣接するパラナ州に多く暮らしていたのです。今は日本企業が数多く進出したこともあり、生活圏は他の州や都市にも広がって、ブラジル全体で約200万人前後の日系ブラジル人が暮らしていると推定されています。

日系ブラジル人の結束は強く、県人会なども組織してともに助け合って生きてきました。ただ、3世、4世の時代になってきた今、日系人コミュニティのつながりは以前ほど強くななくなってきたようです。かつては、イベントやお祭りを開くと大勢の日系人が参加し、とても盛り上がりました。4世ともなると、自分たちは日系移民であることをあまり意識せず仕事や生活をするようになっていきました。日本語を話さない親もいますし、日系人としてのアイデンティティが薄くなってきている若者も増えていきます。ブラジル人やほかの民族の人と結婚し、社会的なつながりも外へ外へと広がっているのです。

時が経てば、それは当然のこと。日系ブラジル人だけではなく、ポルトガルやドイツなどほかの国からの移民も同じ状況にあります。日系移民であることの意識が薄まるのは、ブラジルとの距離が近づいている証しですから、いいことだとも言えるでしょう。

日本とブラジルを行き来しながら仕事と生活をするなかでよく考えるのは、たがいの国がよりよく近づくためにはどうすればいいかということ。大切なのは、自国のやり方を強要せず、相手国の習慣や文化を尊重することでしょう。「日本ではこうだから」とブラジルの習慣や文化を拒否するのではなく、両国の習慣や文化を上手に融合させ、たがいに納得するかたちで物事を進めていけばいいのです。その姿勢は、たがいの国の本質を見極めることにもつながります。

そういえば、サッカー教室を長く開催してきたのですが、日本では子どもが自分のボールを持っているのは普通です



イラスト●中村知史

ね。だから、日本の子どもはリフティングがとても上手。でも途上国の子どもたちはみんな一つ一つのボール。いつも取り合いです。途上国の子どもはボールのパス能力やキープ力がとても高い。どちらも必要な力ですが、こんなところにも違いがあります。

ではそこで、たとえば途上国の子どもたちがポロポロのサッカーボールで遊んでいる様子を目にした先進国の団体が、新品のボールを贈ったとします。もちろん、それは喜ばしいことですが、子どもたちが本当に必要としているのは学校です。教育を受けることです。子どもたちは学校に行けない事情があるからストリートでサッカーをして遊び、ボールがポロポロなのは家が貧しいから。新品のボールを与えると、ますます学校には行かなくなりそうです。もしも学校に行けるなら喜んで通うでしょう。鉛筆がすり減りなくなるまで勉強するはず。だから、ぜひ子どもたちには学校を建ててあげてほしい。国にとって必要な人材を育成するのは時間がかかることですが、20年、30年経って、教育を受けた子どもたちが豊かな知識を持った大人になり、仕事に就き、貧困から抜け出したとき、その国はもつと強くなると信じています。

一つ、私にアイデアがあります。子どもたちの教育の一環として、サッカーでも野球でもよいのですが「JICA杯」を創設するのもおもしろいですね。企業などにスポンサーになつてもらい、勝ち進んだら日本に招き、日本の子どもたちと試合を行うのです。スポーツはとても素敵な交流の手段だと思えます。日本と途上国の子どもたちの交流は日本の国際協力の存在感をいっそう高めるでしょう。

私は日本とブラジル双方のアイデンティティを持ち生きてきました—— 続く世界の子どもたちがさらに多くの国や民族と豊かな交流をすることは、国を超えた国際人の意識を育むことにも力を発揮すると思えます。

セルジオ越後(セルジオ・えちご)

サッカー解説者。1945年、ブラジル・サンパウロ生まれ。18歳でサンパウロの名門クラブ「コリンチャンス」とプロ契約。ブラジル代表候補にも選ばれる。72年に来日し、藤和不動産サッカー部(現・湘南ベルマーレ)に所属。78年より日本サッカー協会公認「さわやかサッカー教室」(現・アクエリアスサッカークリニック)の認定指導員として全国の青少年のサッカー指導にあたる。2006年、文部科学省生涯スポーツ功労者表彰受賞。13年、日本におけるサッカーの普及を評価され外務大臣表彰を受賞。17年、旭日双光章受章。HC栃木日光アイスバックス シニアディレクター、JAJA日本アンブティサッカー協会スーパーバイザーとしても活動中。

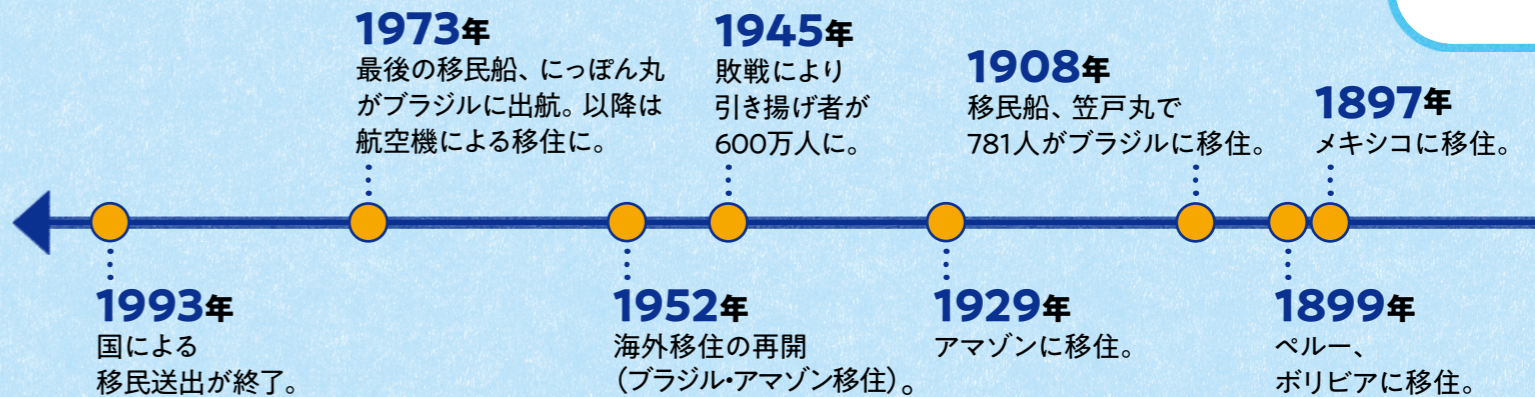
日系社会と ともに歩む

日本から見れば地球の反対側に位置する中南米。遠く離れた国々だがそこには歴史的に深いつながりがあり、日本と信頼関係を築いてきた。

文●小西威史

中南米と日本のおもな移住の歴史

日本の海外移住の歴史は1868年のハワイ(当時は独立国)がはじまり、19世紀末から中南米への移住が始まった。



出展：外務省「日本と中南米」をもとに作成。

約120年前から始まった中南米への集団移民

ブラジルには「ジャポネス・ガランチード」という言葉がある。ポルトガル語で「日本人は信頼できる」という意味だ。

この信頼感は中南米の各国に共通している。中南米には親目の国が多く、日本の企業が進出するとき、観光で訪ねるときにも、日本人を好意的に受け入れてくれる。その礎を築いたのが、19世紀末(明治30年代ごろ)から始まった中南米への日本人移住者たちだ。今ではその子孫の6世も誕生し、中南米全体に200万人を超える日系人がいるといわれている。

日本から海外への集団移民は明治維新が起きた1868(明治元年)年、海外で稼いで故郷で一旗揚げようという約150人がハワイへ渡り、サトウキビ耕地の労働者となったのが皮切りだ。その後、中南米が移住先となったのは、1862年のアメリカでのリンカーンによる有名な奴隷解放宣言に続く、中南米各国での奴隷解放

の動きがきっかけだ。コーヒーなどの大規模農場では労働者不足が起き、人手が必要とされていた。

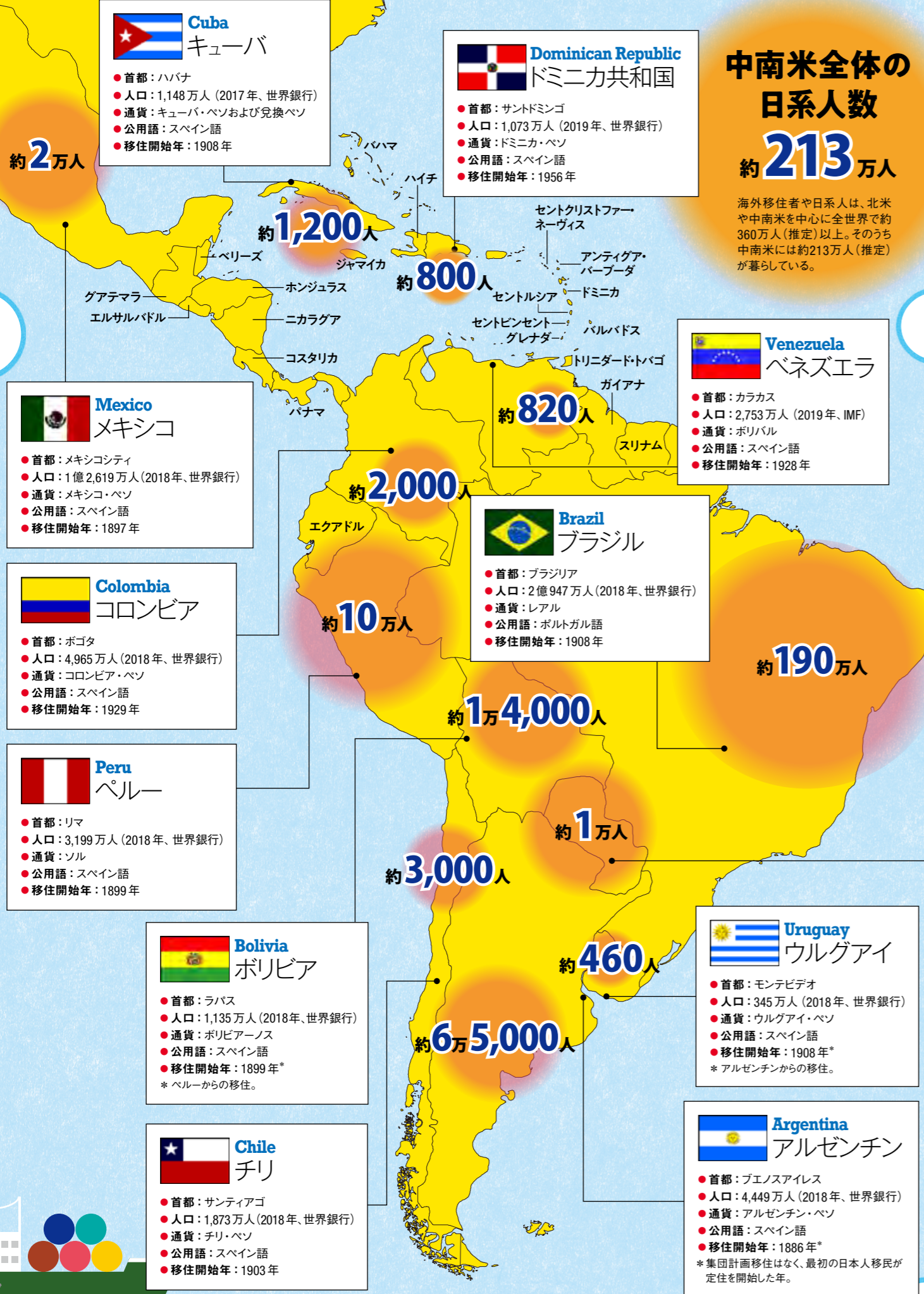
移民の流れはその後、歴史的な出来事とともに変遷していく。関東大震災(1923年)の後に罹災者に対する移住が奨励され、第2次世界大戦後は1952年から移民事業が再開され、多くの日本人が中南米へ渡った。ただ、夢に描いた暮らしをすぐに得られなかったわけではない。とくに明治期に移住した日本人たちは、低賃金労働を強いられ、未開の原始林の開拓に悪戦苦闘したり、マラリアなどの風土病に悩まされたりした。そんななかでも、野菜栽培を始めた日系人が、農業協同組合を立ち上げて野菜の流通を広げていった結果、肉食が中心であった現地の人々の食生活改善に資するなどして現地社会に貢献していった。

また、日本が経済成長を果した1980年代ごろからは、人手不足の日本にブラジルから日系人が働きに来るようになった。中南米と日本は歴史を共有し、たがいに助け合ってきた間柄だ。

今日では中南米の多くが経済的に中進国以上となった。先人が築いてきた信頼関係を生かし、パートナーとして経済発展や環境問題にも取り組む時代となっている。

中南米全体の日系人数 約213万人

海外移住者や日系人は、北米や中南米を中心に全世界で約360万人(推定)以上。そのうち中南米には約213万人(推定)が暮らしている。



出展：日系人数の推定は外務省「日本と中南米をつなぐ日系人」をもとに作成。移住開始年はJICA「JICAと中南米日系社会」をもとに作成。

特集 **中南米**
日系社会とともに歩む

1位	アイスランド	0.877
2位	ノルウェー	0.842
3位	フィンランド	0.832
5位	ニカラグア	0.804
13位	コスタリカ	0.782
22位	コロンビア	0.758
24位	トリニダード・トバゴ	0.756
25位	メキシコ	0.754
28位	バルバドス	0.749
30位	アルゼンチン	0.746
31位	キューバ	0.746
37位	ウルグアイ	0.737
41位	ジャマイカ	0.735
42位	ボリビア	0.734
46位	パナマ	0.730
48位	エクアドル	0.729
121位	日本	0.652

男女格差 (ジェンダーギャップ)

各国の経済、政治、教育、健康の4分野のデータをもとに、男女の違いにより生じる格差を測ったものがジェンダーギャップ指数。数値が1に近いほど平等に近いことを表す。地域別に見ると西ヨーロッパ(76.7%)、北アメリカ(72.9%)、中南米(72.2%)と続く。ちなみに日本は153か国中、121位と、かなり出遅れている。

31位	キューバ	0.746
37位	ウルグアイ	0.737
41位	ジャマイカ	0.735
42位	ボリビア	0.734
46位	パナマ	0.730
48位	エクアドル	0.729
121位	日本	0.652

科学系博士号の取得者数

世界の科学系分野(自然科学・工学・社会科学)の博士号取得者数(2016年)では、ブラジルが上位に。

1位	アメリカ	3万9,710人
2位	中国	3万4,440人
3位	インド	1万5,967人
7位	ブラジル	1万4,669人
10位	日本	7,391人
16位	メキシコ	2,654人
22位	アルゼンチン	1,716人
41位	チリ	495人
42位	コロンビア	395人

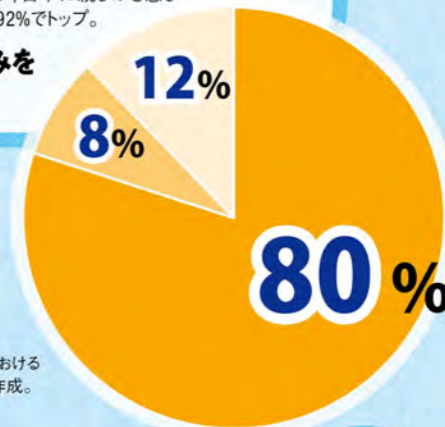
資料: GLOBAL NOTE
出典: National Science Fundationをもとに作成。

親しまれる日本

親日国が多いといわれる中南米。同地域の5か国(メキシコ、ブラジル、コロンビア、チリ、トリニダード・トバゴ)を対象にした調査では、8割の人が「日本に親しみを感ずる」と回答。個別ではブラジルが92%でトップ。

あなたは日本に親しみを感ずるか?

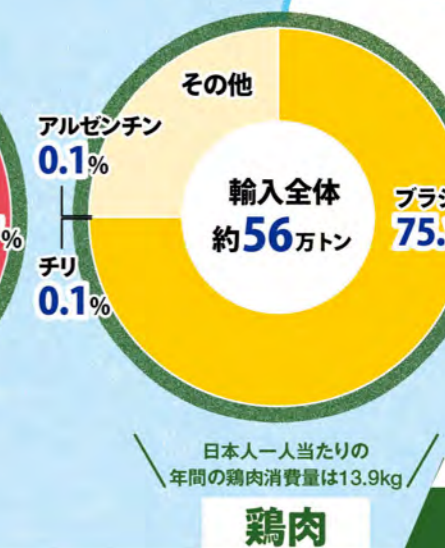
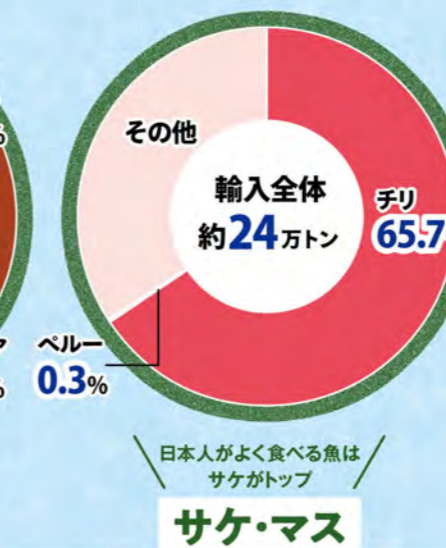
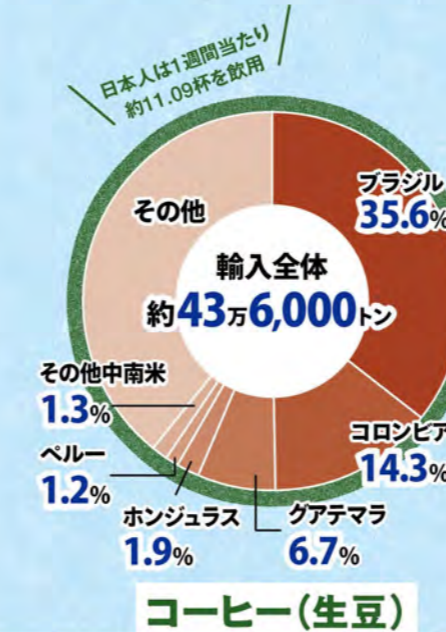
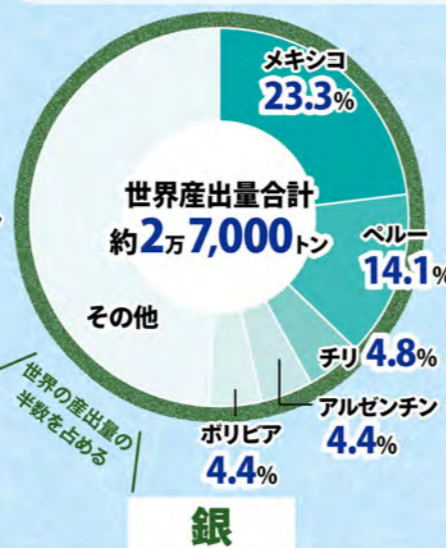
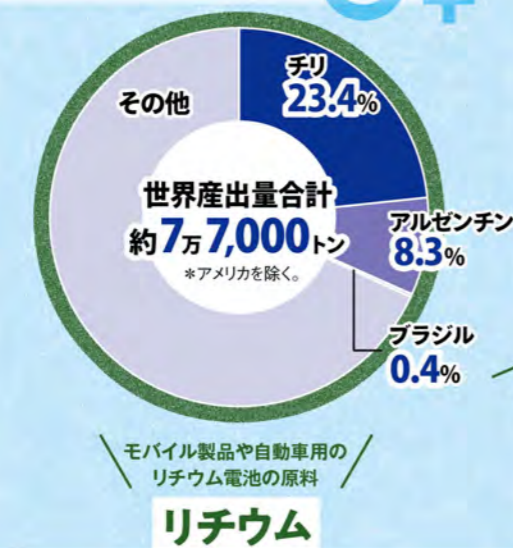
- 親しみを感ずる・どちらかという親しみを感ずる
- どちらかという親しみを感ずらない・親しみを感ずらない
- わからない



出典: 外務省「中南米地域5か国における対日世論調査」(2015年)をもとに作成。

中南米を知る

中南米地域は33か国、暮らしている人々は約6.4億人(2017年、世界銀行)。日系社会の存在や、食料・鉱物資源の輸入などで日本とも強い結びつきがある。自然や文化、人々のことをもっと知ってみよう。



中南米におけるおもな資源の産出量

出典: U.S. Geological Survey「Mineral Commodity Summaries, January 2020」をもとに作成。

中南米から日本へ輸出されるおもな食料品

出典: 財務省の貿易統計、農林水産省「食糧需給表」、水産庁「図で見る日本の水産」、IOC(国際コーヒー機関)の資料をもとに作成。

地域や町を元気に! 一村一品運動

中南米の国々は、おたがいに切磋琢磨しながら一村一品運動*に取り組んでいる。地域や町の活性化を目指して新しい商品が次々と生まれている。

* 地域の特産を付加価値の高い商品に変えて販売し、経済の活性化を図ること。JICAは各国で協力している。

アルゼンチン

より魅力的な観光地に

世界三大瀑布の一つ、イグアスの滝を有するミシオネス州では、同地を訪れる観光客に向けて周辺の名所や産品のアピールに取り組んでいる。先住民が守ってきた自然や生活をエコツーリズムとして紹介するとともに、伝統工芸品の木彫りや籐製品の開発を進めている。

木彫りは地元のジャングルで暮らす動物や鳥がモチーフ。籐細工の色や編み方は家族や集落ごとに異なる。



エクアドル

暮らしに根づく刺繍工芸品

エクアドル北部のアンデス高地に位置するインパブラ県のスレタ地区・エスベランサ地区では、1940年代からスペイン刺繍技術を用いた刺繍工芸品が作られている。素朴な模様ややさしい色合いを合わせた刺繍は地域の宝物といえるもので、地元住民がていねいに刺している。

民族衣装やテーブルクロス、壁飾りなどを製作。縫製もていねいで長く使える。



コロンビア

全国規模で一村一品が普及

2009年から長く一村一品運動に携わり、国内12か所以上の生産者グループが工芸品、農畜産品、観光資源商品などを開発している。南米伝統のソンプレロ(つば付き麦わら帽子)をはじめ、砂漠の夜空の天体観測やコーヒー産地の景観を売りにしたものなどバラエティが豊かな。

右: ビジャビエハ市の天体観測。左: トウチン市のソンプレロ。



ホンジュラス

コーヒーに並ぶ名産品に

ホンジュラスは国内3か所で一村一品運動を推進。北西部のサンタバルバラ県はコーヒーの一大生産地として知られる一方で、新たな産業を育てようと木工玩具を商品化した。日本で学んだ帰国研修員が中心となって地域のコミュニティとともに取り組んでいる。

サンタバルバラ県サンマルコス市の民芸品のひとつ、トロンボ(こま)のおもちゃ。



グアテマラ

マヤ文化の織物をアレンジ

グアテマラには22の民族集団が住むといわれていて、それぞれ独自の模様や織り方を現代に引き継いでいる。伝統織物の生地を使った商品は、財布や小物入れ、ショール、女性用靴など幅広く、どれもカラフルで繊細な魅力がある。

右: ソロラ地方の織物。左: トニコバン地方の織物の女性用靴は米ニューヨークでも販売される。



エルサルバドル

「おいしい」と評判のジャム

エルサルバドル中央部のサンビセンテ県サンビセンテ市は、地場の素材を生かしたジャムを商品化。口に入れるとほのかに香るココナッツと刻んだパイナップルの食感を楽しめ、アイスやヨーグルト、グラノーラ、サワークリームとも相性もばっちり。地域を代表するブランド品だ。

メルメラータ・ピーニャ・コラーダ(パイナップルなど地元の産品を使ったジャム)。



次の世代を考え、
環境を大切にする経営を



上：タフコ農場の中を流れる小川。今後は計画的に植樹を進め、マンゴーなどの果樹栽培も行う。
左：牛の放牧。約120年前、1世たちが原野を切り開いて農場にした。



タフコ農場代表
フアレス 山本 ハビエル
(フアレス・やまもと・ハビエル)さん

「日系人団体のアカコヤグア江戸村協会にも所属しています。日本からお客さんが来られるときは案内などもしています。日本とメキシコはパートナー。友好関係を深めるためのお手伝いをしていきます」



日本との関係も
深めていきたい

牧場運営とともに
地域にも貢献

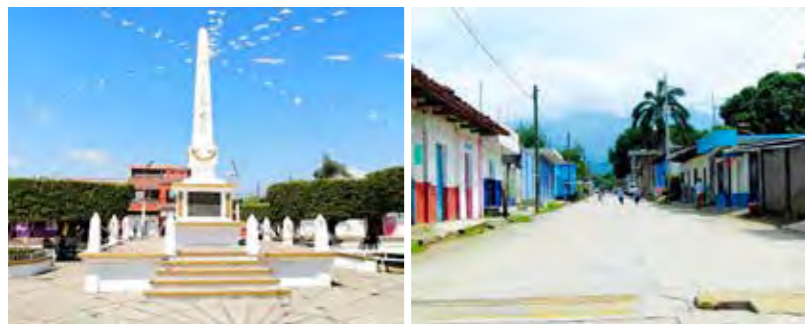


タフコ農場の運営を任された山本浅次郎。愛知県出身で榎本殖民団に参加した。

歴史を紡ぐ中南米と日本 CASE1  メキシコ

1世が開拓した農場を 4世が守り、次世代へ

メキシコは、日本が開国後に初めて平等条約を結んだ相手国。その後も友好関係が続いている。日本から中南米への集団移民もメキシコから始まった。



左：1968年にアカコヤグアに建立された榎本殖民記念碑。今でも公園の中にある。
右：現在のアカコヤグア。日本の名字を持つ日系人が多く暮らす。

残った者で興した組合
ただ、そんななかでも現地にとどまり、独自に開拓に取り組む者たちがいた。彼らは町で雑貨店経営を始めた。苗の入手も難しい状況で、事前の調査不足が招いた悲劇だった。また、マラリアを媒介する蚊も多く、開拓労働の疲れと不衛生な環境から病人が続出。そんな状況から入殖後2か月ほどで団員10人が逃亡するなどし、日本からの資金送金も途絶え、まもなく殖民地計画は頓挫した。

「その歴史は私にとつての誇りです。日本人の誠実さ、勤勉さ、他者への尊敬の心を受け継ぎ、日系人として、メキシコ人として次の世代に伝えていきます。私にできることとして、環境にやさしい農場経営を進めています」と農場の未来を展望している。

「苗の入手も難しい状況で、事前の調査不足が招いた悲劇だった。また、マラリアを媒介する蚊も多く、開拓労働の疲れと不衛生な環境から病人が続出。そんな状況から入殖後2か月ほどで団員10人が逃亡するなどし、日本からの資金送金も途絶え、まもなく殖民地計画は頓挫した。」

「ただ、そんななかでも現地にとどまり、独自に開拓に取り組む者たちがいた。彼らは町で雑貨店経営を始めた。苗の入手も難しい状況で、事前の調査不足が招いた悲劇だった。また、マラリアを媒介する蚊も多く、開拓労働の疲れと不衛生な環境から病人が続出。そんな状況から入殖後2か月ほどで団員10人が逃亡するなどし、日本からの資金送金も途絶え、まもなく殖民地計画は頓挫した。」

「苗の入手も難しい状況で、事前の調査不足が招いた悲劇だった。また、マラリアを媒介する蚊も多く、開拓労働の疲れと不衛生な環境から病人が続出。そんな状況から入殖後2か月ほどで団員10人が逃亡するなどし、日本からの資金送金も途絶え、まもなく殖民地計画は頓挫した。」



農場の土地に関する契約書。書面には設立当時の理事の名前も見られる。



左：日墨協働会社が経営をしていた薬局。ほかにも雑貨店を営んでいた。
右：1911年当時のタフコ農場。醸造所もあり、ラム酒を造って販売していた。

「その歴史は私にとつての誇りです。日本人の誠実さ、勤勉さ、他者への尊敬の心を受け継ぎ、日系人として、メキシコ人として次の世代に伝えていきます。私にできることとして、環境にやさしい農場経営を進めています」と農場の未来を展望している。

「苗の入手も難しい状況で、事前の調査不足が招いた悲劇だった。また、マラリアを媒介する蚊も多く、開拓労働の疲れと不衛生な環境から病人が続出。そんな状況から入殖後2か月ほどで団員10人が逃亡するなどし、日本からの資金送金も途絶え、まもなく殖民地計画は頓挫した。」

「ただ、そんななかでも現地にとどまり、独自に開拓に取り組む者たちがいた。彼らは町で雑貨店経営を始めた。苗の入手も難しい状況で、事前の調査不足が招いた悲劇だった。また、マラリアを媒介する蚊も多く、開拓労働の疲れと不衛生な環境から病人が続出。そんな状況から入殖後2か月ほどで団員10人が逃亡するなどし、日本からの資金送金も途絶え、まもなく殖民地計画は頓挫した。」

「苗の入手も難しい状況で、事前の調査不足が招いた悲劇だった。また、マラリアを媒介する蚊も多く、開拓労働の疲れと不衛生な環境から病人が続出。そんな状況から入殖後2か月ほどで団員10人が逃亡するなどし、日本からの資金送金も途絶え、まもなく殖民地計画は頓挫した。」

殖民団が直面した
厳しい現実



ブラジル日本移民史料館 運営委員長 山下 リジア 玲子 (やました・リジア・れいこ)さん
「現在はコロナ禍で閉館中ですが、オンラインを活用してブラジル国内だけでなく、ハワイを含む北米と南米各国にある日系移民史料館、横浜の資料館をつなぐシンポジウムを企画中です」



サンパウロにあります/
ブラジル日本移民史料館

左：“活きた史料館”としてリニューアルした際のオープニングセレモニー。
下：展示通路では、時代に沿ってわかりやすく当時の暮らしを伝える。



右：市場に出店し、野菜売りをしている日系人。
下：サイザル麻の栽培。1haあたり粗糸にして約600kg前後が生産できた。



歴史を紡ぐ中南米と日本 CASE2  **ブラジル**

移民の歴史を未来に伝える

日本から中南米に渡った移住者たち。移住は単に“出稼ぎ”ということだけでなく、相手国の国づくりへの貢献につながっていった。その歴史を後世に残す取り組みを紹介する。

ブラジルのサンパウロにあるリベルダーゼ東洋人街。この地区にブラジル日本移民史料館もある。



ブラジル北東部に移住した日本人。ここでは棉や豆類、米、野菜などを栽培していた。



林から切り出した木を使い、ピメンタ(コショウ)栽培用の支柱を作っている。



サントス港での下船風景。船上で入国検査が行われ、その後税関検査場へ行く。



ブラジルのサントス港に停泊する移民船のぶらじる丸。約23万人がこの港から南米に入った。

p.10-11のモノクロ写真6点はすべてJICA横浜 海外移住資料館所蔵。



右：移住者が携行したトランクの展示コーナー。
上：ブラジルに渡った女性のトランク。「荷物は少なく」と言われた、身の回りのものだけを詰めた。役立ったのは子ども用洗腸器や裁縫道具だったという。



明治期の日本人の暮らしも見えてくる/
JICA横浜 海外移住資料館

移住者が使った農機具の展示。大地を耕し、さまざまな農作物栽培に挑戦した。

現在、新聞がスキャンできる大型スキヤナーをJICAブラジル事務所が貸与し、デジタル化を進めているところだ。

横浜市には「JICA横浜海外移住資料館」がある。2002年の開館で、梅棹氏が特別監修として関わった。もともとJICAの前身組織の一つが戦後の移住事業に携わっており、横浜は移住船出港地だった。

ここでは日本を旅立った人々が移住先でどのように文明づくりに参加し、その地に貢献してきたかが総覧できる。100年以上前の移住者たちが「国際協力」の先駆者として、それぞれの国で信頼を得てきたことが見えてくる。

新しい文明をつくる参加者たち

ブラジルへの移民は1908年、笠戸丸で海を渡った781人が始まりだ。今では約200万人の日系人がブラジルで暮らす。そのブラジル移民70周年の節目となった1978年に、サンパウロで記念の国際シンポジウムが開かれた。そこで基調講演を行ったのが、知の巨人と呼ばれ、当時は国立民族学博物館の館長を務めていた梅棹忠夫氏（2010年没）だ。

基調講演のタイトルは「われら新世界に参加す」。移民を「出稼ぎ」という次元ではなく、人類史の中で捉え、その文明的意味を考へるべきだと問いかけた。そして、日本からの移民をブラジルは新文明への参加者として受け入れたことを指摘し、「お客でもなければ、割り込んできた侵入者でもない。参加者である。これが日本人移住者というものの文明史の意味である。日本人はまさに新文明形成の参加者であった」とまとめた。

実際、日本人は原始林を開拓し、農業を振興し、町をも興していった。また、ブラジルで生まれた2世、3世への教育を重視し、やがて彼らは政界や官界に進んだり、医師や弁護士、教員、芸術家など広範な分野の職に就くなどしてブ

史料館をネットワーク化

そんな移民の歴史を後世に残すべく、「われら新世界に参加す」という概念や、梅棹氏が提唱していた「歴史の真実を発掘し、新たな知識を共有できる『活きた史料館』」を展示テーマにした史料館がブラジルと日本にある。

サンパウロにある「ブラジル日本移民史料館」は、梅棹氏の講演と同じ1978年に開館した。ビル内の3フロアを使い、初期移民の暮らしを伝える生活道具や開拓小屋などの展示から、戦後に至るまでの日系社会の歴史を紹介している。3年前からは「活きた史料館」をコンセプトに順次リニューアルも進めていて、今年1月には「移民史・日本文化研究センター」を設立した。

同館の運営委員長を務める日系2世の山下リジア玲子さんは、「ブラジル国内にはほかにも史料館が点在しています。個人で史料館を運営されている方もいます。ただ、高齢化で継続できなくなったり、地元の行政に運営を託したものの、放置されてしまうようなところもあり、まずは今、史料館同士の協力ができるようネットワーク化を進めています」と話す。また、邦字新聞など貴重な史料の中には年月による劣化が深刻なものもある。

ブラジル日本移民史料館とJICA横浜 海外移住資料館の詳細は各ウェブサイトです。

ブラジル日本移民史料館



JICA横浜 海外移住資料館





住み慣れた地域で健康的に暮らすことが高齢社会には重要です!

Brazil
ブラジル
堤エリカさん

地域活動を通じて 日系社会と日本の懸け橋に

日本で仕事していた母の入院をきっかけに1990年来日しました。茨城県内の病院に勤務しながら看護学校に通って准看護師になり、その後大学に入学して看護師と保健師の資格を取得しました。しかし、年齢制限から行政の保健師にはならず、総合病院で訪問診療看護師をして経験を重ねましたが、夢を捨てずに退職しました。栃木県の専門学校で講師の職に就き、在宅看護などについて9年間教えました。その後、地域密着型の介護施設での勤務を経て、年齢制限のない条件の関連施設に異動し、昨年12月から栃木県の地域包括支援センターで保健師として働いています。介護、福祉、健康、医療面などから高齢者の自立した生活を支援する仕事で、私は健康管理や介護のアドバイスをしています。

新型コロナウイルス感染症の影響で公共施設での交流を兼ねた介護予防体操ができなくなり、自宅でも取り組むように呼び



担当地域の高齢者の健康状態や生活の様子を把握するため、堤さんは個別訪問を行っている。



現在の職場

高齢者の自立支援のため、栃木県那須塩原市が主催する体操教室。

かけたり、感染対策の指導をしたりしました。自粛生活を経て高齢者の認知機能や運動機能が低下するケースが見られて家族からの相談が相次ぐなか、他者との交流の大切さを再確認。現在は高齢者の体調を把握しながら再開し始めた体操の場で体力測定や健康相談を実施しています。高齢社会を迎えたメキシコやブラジルでも日本と同様の問題が起きているため、私はJICAが開催予定のウェビナー*を通じて日本で得た知見を伝え、高齢者が住みやすい日系社会づくりのお手伝いできたらと思っています。

私自身はいろいろな方の支えがあり、保健師の夢をかなえることができました。私が働く地域には日系人約3,000人が暮らし、医療通訳や学生の進学相談を引き受けることがあります。言葉の壁に悩む在日日系人のサポートもしていきたいです。

* ウェビナーを組み合わせた造語で、オンラインセミナーのこと。2021年2月にメキシコで高齢者ケアに関するウェビナーの開催を予定している(p.20)。



堤さんは来日後に病院に勤務しながら、准看護師になる勉強をしていた。



上：保健師の資格を取得するにあたり、大学の授業で高齢者と外出をする実習に参加した。
左：研修をともにした看護師教員の仲間と、教員になって1周年を記念して集まった。

COLUMN

日系社会研修(多文化共生推進/NIKKEI協力型)

「日系社会研修」の目的は、日系社会のさらなる発展と移住先の国づくりに貢献すること。研修では、中南米の日系社会と日本の連携に主導的な役割を果たすが「日本語教師」や「高齢者介護」など専門分野を学ぶ。2020年より「日系社会研修(多文化共生推進/NIKKEI協力型)」として、在日日系社会の課題解決にも貢献する新たなタイプの研修が始まろうとしている。

現在約24万人の日系人が日本で暮らし、日本経済を支えているが、日本語の理解が十分でないことから子どもの就学、病院などの公共サービス、高齢化への対応などさまざまな困難に直面している。そこで、研修員として学びながらこれらの課題解決にも関わり、中南米日系社会と日本国内の日系社会をつなぐ懸け橋としての新たな役割を担うことが期待されている。



JICAペルー事務所
小谷知之
(おだに・ともゆき)さん

日系社会研修は、日本への帰属意識を高める重要な機会としても研修員から評価されています。そして、新たな研修において在日日系人の課題解決に関わることで、その人と周囲の人たちのさらなる喜びにつながることを期待しています。

日系社会と深まる交流 CASE1

高齢者ケアの最前線で活躍

日本国内の現場でも生き生きと働く日系人たち。
日本と中南米地域の課題を解決する活躍がこれからも期待されている。

文●久保田 真理

看護師時代の
経験も生かしながら
介護の仕事に奮闘中!



Paraguay
パラグアイ
榎みつるさん

非常時でも迅速な対応で高齢者をサポート

パラグアイで准看護師の資格を取得した私には、両親の祖国である日本への憧れと、先進国の医療を学んでパラグアイで役立てたいという両国への思いがありました。そこで1988年4月から2年間、JICAを通じて神奈川県内の病院で実務研修に参加。帰国して1年間はパラグアイにある出身地の病院に勤務した後、再来日して姉が暮らす静岡県に行き、製造業や美容関係の仕事に就きました。退職後、日本の看護師資格がなくても自身の経験や知識を生かせる仕事への転職を考えて、失業給付を受けながら高齢化社会に役立つヘルパー1級を取得し、介護老人保健施設で介護の仕事に従事。その後、介護福祉士と介護支援専門員の資格も取得しました。

2007年からは東京都内の居宅介護支援事業所に勤

務し、自宅で介護が必要な方のプランを作成する仕事をしています。30人以上の方を担当し、月に1度は訪問して支援の様子を記録する必要があり、いそがしい毎日を送っています。看護の知識や経験は、利用者の症状を適切に把握してアドバイスをするうえで役立っていますね。コロナ禍になり、消毒やマスク着用を徹底したうえで利用者の通所サービスを減らして訪問に切り替えることで、利用者の不安や感染リスクを減らしました。このスピーディな対応はたいへん勉強になりました。

日々の仕事が落ち着き、心に余裕をもてたら将来のことも考えていきたいと思っています。



JICA研修時の仲間と毎年顔を合わせ、昨年は90歳になった当時の先生を囲んだ。



左：榎さんが働く職場で同僚と一緒に。
下：東京都内の居宅介護支援事業所に勤務する榎さん。電話対応や利用者の自宅訪問などいそがしい毎日を送る。



現在の職場

看護師として病院での実務研修を受けるために来日した際に、同時期にJICA研修を受けた仲間と。



協議会の話し合いのなかから新たに生まれたプロジェクトもある。そのひとつが「栄養士プロジェクト」だ。第1回の協議会でサンタクルス病院が「日本が誇る健康食としての和食をブラジルに普及させることを目指して病院食に和食を取り入れよう」と提案したことから始まった。「サンタクルス病院では以前から和食の病院食を提供しています。質をいまいち高め

社会全体の健康増進を目指して

のだからという。協議会では80名にも上る参加者数となった。協議会にはふたつの大きな目的がある。ひとつ目は日系病院間の協力関係を深めること。ふたつ目はすぐれた製品や技術、知識を日系病院に取り入れるために日本の企業、大学、病院との関係をつくることだ。そのための試みとして、第3回の協議会では日本の医療機器メーカーと医師・看護師がチームを組んで製品のプレゼンテーションを行った。日頃から製品を使用している医師や看護師からの話が聞けるため、使用イメージが湧きやすいと好評だ。これは参加病院のサンタクルス病院でもともに行われていた「ショールーム」というプロジェクトを協議会のプログラムに取り入れたもの

深まる日系病院間の交流

日系人が設立し運営を行う日系病院は、ペルーやアルゼンチン、ボリビアなど中南米の国に点在している。なかでもブラジルは、国内の日系病院間の連携を強めることとさらなる医療サービスの向上を目指している。その動きの中心となる話し合いの場が日系病院連携協議会だ。「以前 JICA の取り組みとして、ブラジルの日系6病院の代表を日本に招いて、日本の医療技術、サービスを見てもらったことがありました。それがきっかけでこれまであまり交流がなかった日系病院同士がつながり集まって話せる場がもつとほしいという声で日系病院側から上がったのです」と、JICA ブラジル事務所長の佐藤洋史さんは振り返る。2018年5月、JICA からこの日系6病院に声をかける形で第1回日系病院連携協議会が開催された。

第2回以降は日系病院が主催となつてこれまでに3回実施。プログラムは日系病院間での意見交換がメインの第1部と、医療関連の日本企業や日系企業を交えて提案などを行う第2部で構成されている。日系病院の理事長・理事のほか、サンパウロ日本国総領事館、日本の医療機器メーカー、日本の大学関係者も参加し、第3回の協

右：サンタクルス病院で提供している和食を取り入れた病院食。
下：協議会から生まれた「栄養士プロジェクト」で、病院食のレシピ開発を行う日系病院の栄養士たち。



日系病院間の話し合いでは、さまざまな意見交換が行われる。



第2回の協議会では、参加日系病院内の視察も実施した。



中米で開発した教科書を日本国内でも活用

JICAは1990年代よりスペイン語圏の中米4か国で算数教育の質向上を目指す協力を実施。そのひとつとして初等、中等教育で使う算数・数学教科書作りに取り組んでいる。一方で、ホンジュラスで制作された小学校1年生から6年生の算数教科書を兵庫県子ども多文化共生センターに寄贈するなど、プロジェクトの成果物を日本国内のスペイン語を母語とする子どもたちの学習に役立ててもらう機会も増やしている。エルサルバドルで制作された小学校1年生から高校2年生の教科書・指導書・生徒用練習帳についてはJICAのウェブサイト上で公開しており、誰でも自由にダウンロードが可能だ。

ダウンロードページは
こちら



日本の小学校で、エルサルバドルの算数練習帳を使って学習するスペイン語を母語とする子どもと教員。



JICAブラジル事務所長 佐藤洋史 (さとうひろし)さん

「日系6病院が集まる日系病院連携協議会は、市場開拓の場として多くの日本企業が興味を持ってきています。医療を通じた日本とブラジルの協力関係はこれからも続きます」

右：第3回の協議会で行われた「ショールーム」の様子。左：日本の医療機器を紹介する展示会も開かれた。

に和食のすばらしさを広めることができれば、社会全体として健康の増進に貢献できると思っ「ます」と、同病院理事長のレナット・イシカワさんは話す。その後、JICAの協力のもと九州大学で日本の病院食について学ぶ研修が行われ、日系6病院を中心とする7名の栄養士が参加した。現在この栄養士たちと九州大学によって和食の病院食のレシピ開発が行われている。レシピ本が完成した際は、日系病院に限らずブラジル国内のすべての病院と情報を共有することも考えているという。

協議会は今後も定期的に開催し、コロナ禍下における各日系病院の情報交換にも役立てていく。「これからは次世代の日系人医師たちにも呼びかけていくつもりです。彼らの多くは日本語を話さず、日本に滞在した経験もありませんが、ルーツが日本にあるのは確かです。協議会を次世代日系人医師のよりどころにする役目もあると感じています」と、イシカワさんは新たな役割について力強く語った。



サンタクルス病院 理事長 レナット・イシカワさん

「日系病院として日本というルーツを大事にしています。ほかの日系病院とも連携して、和食の病院食をはじめとする日本的なサービスを取り入れ深めたいと考えています」

日系社会と深まる交流 CASE2  ブラジル

日系病院の連携で社会全体の医療の質を上げる

ブラジルで始まった日系病院連携協議会。この新たな話し合いの場が、医療サービスの向上を目指す日系病院同士のつながりだけでなく、医療を通じた日本と日系社会との新たな関係をも築いている。

文●坪根育美

現場の視察は、
多くのことを
教えてくれます

日本とチリが培ってきた
防災の知見を中南米へ
KIZUNAプロジェクト



チリ国家緊急対策室 (ONEMI)
元副長官・防災コンサルタント
ビクトル・オレジャーナさん

「10年近くチリと日本の防災分野での協力を携わってきました。KIZUNAプロジェクトで最も大切にしたのは「人と人とのきずな」です。チリでの防災体制は強化されてきましたが、都市への人口集中でこれまでにないリスクも高まっています。今後も日本と協力して将来の災害に備えていきます」



上：チリ大学で実施している地震学を学ぶディプロマコースで地震計を視察。
下：日本の消防関係者が協力した人命救助訓練。

都市救急救助技術の研究では、倒壊した建物からの救助訓練を実施した。



安全に、迅速に行動!

中南米と手を携えて CASE 1  チリ

防災ネットワークの拠点に

チリは日本と同じく太平洋火山帯に属し、地震や津波、噴火などの災害が多い。そのため、古くから防災分野で協力を進めてきた。しかし今では、ともに他の中南米諸国へ防災政策やノウハウを伝える存在だ。

案件名 中南米防災人材育成拠点化支援プロジェクト (KIZUNAプロジェクト)
2015年3月～2020年3月
災害リスク軽減のためのONEMI組織強化プロジェクト
2018年10月～2021年6月

30年以上の協力

防災分野での日本とチリの協力は1960年から始まっている。橋や堤防など土木構造物の建設や建物の耐震強化への協力を皮切りに、2000年代には災害リスク削減の視点を取り入れた国土計画の作成を実施。ほかにも地震および地殻変動の観測体制の強化への協力、地震工学や防災・減災対策をテーマにした研修を行い、チリの防災能力は向上していった。しかし、2010年に発生したチリ中部地震では500人以上の死者を出し、経済被害も大きく、多くの人が防災能力強化の必要性を再認識した。日本は国際緊急援助や調査団の派遣を行い、以後も継続的に地震・津波への対応能力強化支援、津波防災の共同研究、兵庫県と連携した心のケアモデル構築プロジェクトなど多様な分野で協力を行ってきた。

中南米地域の人材育成を

「こうした長年の協力を経て実現したのが、チリを中南米地域の防災人材育成の拠点として整備するKIZUNAプロジェクトです」とJICAの井上啓さんは話す。同プロジェクトの下、チリの研究者が防災に必要な知識を学ぶ「専門家育成」、中南米地域の行政官を対象に耐震設計や救急救助、森

チリ国内では、 防災拠点の能力を強化 ONEMI組織強化



オリエンタルコンサルタンツグローバル
上席理事
小林一郎 (こばやし いちろう) さん

「今後はパイロット市で、防災プロジェクトの実施に向けた活動をモニタリングする予定です。あと1年、実際に活用できる防災計画策定に向けて協力を続けます」

左上：避難訓練の実施もONEMIが主導する。プンタアレナス市の高校での訓練には警察や市役所も参加した。
左：地方防災計画の演習を行うONEMIの職員。

地方の防災能力を強化

このプロジェクトと同時期に行われたのが、ONEMIの組織能力強化プロジェクトだ。地方政府による防災計画の策定と計画に基づいた防災投資を促進したいというチリ側の要請を受けたもので、地方政府の首長や職員に防災計画の必要性を伝えるビデオ教材の作成や防災計画策定などを行っている。

防災地図で必要な 対策が立てられます



JICAから事業を委託されたオリエンタルコンサルタンツグローバル社の小林一郎さんは、ONEMIの主要メンバーと地方政府の担当者に参加した日本での研修の成果をこう話す。「日本では防災計画の考え方が中央から地方まで統一され、計画に基づいた投資が行われていることを知り、チリでも同じように防災計画を策定する動きにつながりました」。現在は新型コロナウイルスの影響下ながらも防災情報を活用する日本のノウハウの導入を進めている。「両国が防災の知見を共有することで安全・安心な社会になり、さらに両国の交流が活発になるでしょう」と小林さんは期待する。

林火災対策、メンタルヘルスケアなどの研修を行う「行政官育成研修」、そしてこれらに参加した人や機関が知見を共有して協力する「ネットワーク構築と強化」が行われた。

行政官育成研修では、チリが持つ知見や経験、人材を活用しつつ日本からも専門家を派遣した。「救急救助の研修では、チリ消防アカデミーのメンバーと日本の消防庁や名古屋・東京の消防局から派遣された専門家の下、訓練を実施しました。過去の協力があったので、連携もスムーズでした」と井上さんは両国の協力体制を説明する。プロジェクトが送り出した中南米地域の専門家・研修員は5169人。帰国後、彼らは各国で防災対策に取り組んでいる。ペルーでは帰国研修員が主導して港湾での自然災害リスクへの備えとして業務継続計画を作成し、KIZUNAで講師を務めたチリの大学教授を招いて、防災セミナーを開催した。「これは一例ですが、研修のネットワークが継続的に活用されつつあります」と井上さんは成果を感じている。チリの防災を担う国家緊急対策室 (ONEMI) 副長官 (当時) でプロジェクトを担当したビクトル・オレジャーナさんはネットワークの意味をこう語る。「自然災害は国境を超えて発生します。今後は、

COLUMN

舗装道路で流通や生活を改善



案件名 地方道路整備事業

パラグアイでは全道路の8割近くが未舗装で、雨季には状態が悪くなり、ときに寸断されてしまう。主要産業の農畜産業で流通が滞り、住民の多くが学校や病院などに行くことができなくなるため、地方部での早急な道路整備が望まれていた。

そこで同国の公共事業・通信省とJICAが協力し、東部3県にまたがる約150キロの道路の舗装と、老朽化していた27の橋梁の架け替えを実施。交通量や農産物の生産量、公共施設の有無などを基準に、地元の行政や住民の意見を聞きながら整備の優先順位を決めた。これにより交通量は6割増え、走行時間は4割短縮。一年を通して農産物がいち早く市場に届けられるようになり、地域の収入向上や市場の活性化、医療や教育へのアクセス改善など、大きな効果が上がっている。



未舗装の赤土の道路が多く、雨が降るとぬかるんでしまう。

砂や小石(礫)を敷き詰めて舗装した道路。雨でも水がたまず、路面が安定している。

AFTER



卒業!

STEP 3

小規模ビジネスによる生計向上



おいしいパン焼いています!

上: 開業支援の研修には、大勢の女性が集まった。下: プロジェクトを通して起業しパン店を始めた。



社会統合副省 副大臣補佐官
ミルタ・マラディアガさん

「2021年にはさらにモデル世帯を増やしていきます。そのためにも、ホンジュラス国内の多くの機関と協力してプロジェクトを進めていきます」

ホンジュラスに広がる
ACTIVOモデル
88市で普及

Honduras
中南米と手を携えて CASE2 ホンジュラス

三つのステップで
貧困から“卒業”

5人にひとりが貧困層というホンジュラス。政府からの給付金をきっかけに生計向上を図り、貧困から“卒業”するモデルが生まれ、いま全土に広がっている。

案件名 金融包摂を通じたCCT受給世帯の生活改善・生計向上プロジェクト
2015年2月～2020年4月



STEP 2

金融機関への貯蓄の実践



目標を立てて
しっかり貯蓄

上: 金融機関と連携して貯蓄奨励活動を実施。左: 貯蓄を習慣化するために貯蓄額の目標を決めてシートに書き込む。



かいはつマネジメント・コンサルティング
中小零細企業開発部 部長
塚本明広(つかもと・あきひろ)さん

「プロジェクトの初期には私たちが研修を担当することもありましたが、すぐに各市役所の職員らが中心となって各事業が行われるようになりました」

STEP 1

家計管理導入



家計簿で
お金の流れが
一目瞭然!

家計簿のつけ方を学ぶ家計管理研修。

ホンジュラス信用組合連合会
財務部長
フレディ・モラデルさん

「プロジェクトに取り組み1年が過ぎました。特に金融教育をサポートしたいと思い、金融教育や起業家育成の専門家を新たに雇い入れました」



クトでは三つのステップで貧困からの「卒業」を目指した。第1のステップは家計管理だ。受給者の大半が家計を預かる女性であることから、まずなににいくら使っているのかが一目でわかるよう家計簿をつけて家計管理を学ぶ研修を開催した。中には、コーラやお菓子に多くのお金を使っていることに気づき驚く人もいたという。

第2のステップは貯蓄。家計管理ができれば、貧困世帯でも貯蓄が可能になる。「貯蓄を習慣づけて先々の出費に備えることで、不安定な収入でもある程度は生活していけることを理解してもらいました」。同時に地域の金融機関に協力を仰ぎ、金融教育や金融機関がない地域への出張口座開設を実施。また口座開設に必要な預け入れ金の引き下げを促し、貯蓄しやすい環境づくりを行った。

卒業モデルが完成

最後のステップは、貯蓄を活用した小規模ビジネスの立ち上げだ。挑む事業はパン店や理容業、住宅用洗剤の宅配などさまざま。「自分でためたお金の力で真剣さが違います。たとえ失敗しても、貯蓄の習慣ができていたので次の挑戦も可能です」と塚本さん。女性が事業に取り組むことで世帯収入が増え、社会とのつながりや自立を促す効果も生まれている。

あわせて、金融機関には低所得層向けの小規模融資商品の開発を依頼した。全国85の信用組合を統括するホンジュラス信用組合連合会(FACACH)の財務部長のフレディ・モラデルさんは、信用組合が持つ相互扶助の精神から協力したと話す。「プロジェクトで開発した小規模融資と起業家融資は私たちにとても重要な事業となりました。金融機関として起業家の教育や訓練にも関わり、貧困から抜け出す人を増やしていきます」。これまでに1万3000件以上の貧困層に向けた融資が実現している。

この「卒業」モデルは、現地でACTIVOという愛称で呼ばれている。ホンジュラス政府はACTIVOの効果を認め、19年から全国に広げている。担当省庁である社会統合副省の副大臣補佐官ミルタ・マラディアガさんは「わずかな収入でもきちんと管理すれば、小規模なビジネスでそれを増やせることがわかりました。貧困世帯のケアを行うソーシャルワーカーや金融機関、NGOなどとの連携を強めて、ふたたび受給者が貧困状態に戻らないように協力していきます。今は新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあって事業が滞りがちですが、しっかりと進めていきます」と力強く語った。

*2 「Ahorro, Cuenta financiera, Trabajo e Ingreso para la Vida Optimizada(よりよい生活のための貯蓄、口座、労働、収入)」の略語(スペイン語)。アクティブに資産を形成しようという意味を込めている。

1日およそ1・9ドル(約214円)未満で暮らす人が人口の約16%を占めるホンジュラス。最貧困層の貧困脱却を図るための生活保護にあたる条件付き給付金(CCT)はあるが、受給後も貧困から抜け出せない世帯もあった。「CCTを効果的に活用し、極度の貧困から抜け出す仕組みづくりに協力してほしい」という同国からの要請を受け、2015年からJICAの事業が始まった。対象は五つの市でCCTを受け取る約2000世帯。さまざまな国で貧困削減手法として使われてきた「卒業」モデルのホンジュラス版の作成と普及に目標を定めた。

収入の不安定さを解消

JICAからプロジェクトを委託された「かいはつマネジメント・コンサルティング」社の塚本明広さんは、「同国の貧困世帯の特徴は不安定さです」と話す。「彼らはまったく仕事がないわけではなく、安定した職がない人が多く、月々の収入に差があります。農家も収穫期とそうでない時期で収入が異なります。それなのに、CCTを受け取ったために衝動買いをしてしまったり、食品を買って過ぎてロスを出してたり…。お金を計画的に使っていない人が結構多いんです」。そうした状況を受け、プロジェクト

*1 出典：世界銀行、2018年(金額は2011年の購買力平価に基づく)。

食でつなぐ日本と中南米

JICAは食文化を通じた日系社会・地域社会の活性化をテーマに研修を行ってきており、これをきっかけに活躍する人も数多い。

日系4世の常川真由美さんは、チリで和菓子を楽しめるカフェを営む。「小さい頃、日系人グループのおばあちゃんたちが作ってくれた練り切りや蒸しまんじゅうが大好きで、いつか自分で作りたいと思っていました」と常川さん。京都の和菓子店での修業やJICAの食ビジネスについての研修を経て、2018年に自身の店をオープンした。「伝統的な和菓子の世界を多くのチリ人に知ってもらいたい」と夢を語る。

15歳のときに家族とブラジルに移住した伊澤彩子さんはフレンチの料理人。子育てのかたわらパンの販売を始め、2001年に本格的な学びを求めてJICAの研修でル・コルドン・ブルー*3の日本校に通った。そこから順調にキャリアを重ねてブラジルレストラン界の第一線で活躍し、17年には「世界のベストレストラン50*4」の、中南米地域最優秀パティスリーシェフに選出。ブラジルの食材を日本人の感性で生かした洋菓子が高く評価された。「ブラジルの食文化は私の人生の一部」と話す伊澤さん。今後は「まだまだ知られていないブラジルの食文化の魅力を日本に伝える活動にも力を入れていきたい」と力強く語った。

*3 フランスの料理教育機関が展開する料理菓子専門学校。
*4 イギリスのレストラン専門誌「Restaurant」が主催するレストラン格付けと料理人の表彰。



常川さんお手製のあんみつ。

「作夢」オーナー
常川真由美
(つねかわまゆみ)さん



チリ・サンティアゴの「作夢」。

シェフ
伊澤彩子
(いざわさいこ)さん



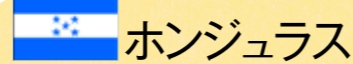
カンブシーという果実など、ブラジル各地方の食材7種類を使ったデザート。



ウェブで広がる学び合い

コロナ禍で人が集まる機会がウェブ上に移っている。JICAの研修を受けて母国へ戻った人々(帰国研修員)の同窓会がウェブ上でのセミナー=ウェビナーを開くなどして学びを深めている。日本の専門家も距離を超えて参加するなど、オンラインならではの展開を見せている。

Honduras



日本とホンジュラスの懸け橋

ホンジュラスではコロナ禍による在宅勤務の機会を活用して、ホンジュラス帰国研修員同窓会(AHBEJA)がウェビナーを開催。テーマはエネルギー、エコツーリズム、起業、生活改善などで、各研修員が日本で得た経験を伝えている。8月の時点で計10回開催され、参加者はホンジュラス国外も含めて平均40人。日・ホンジュラス外交関係樹立85周年関連事業として大使館からも認められている。なおAHBEJAは、これまでも柔道や日本語教育を広めてきた実績があり、外務省から表彰も受けている。

2019年度の同窓会総会に集まった帰国研修員同窓会幹部たち。



Mexico



子どもたちの心のケアを

メキシコでは新型コロナウイルスの感染拡大で、日々の生活に不安を抱える子どもたちが増えている。SATREPSプロジェクト*2の防災教育を通して、防災関係機関は子どもたちの心のケアの大切さを実感していた。そこで7月7日、災害時の子どもたちの心のケアに長年携わってきた専門家を日本から招き、教育現場でできることを考えるウェビナーを実施。メキシコ市や各地の学校関係者など6,788人が参加し、関心の高さがうかがわれた。



プロジェクトでは現地向けの教材を開発して防災教育を実施しており、心のケアに関する知識の普及は防災においても重要。

*2 地球規模課題対応国際科学技術協力「メキシコ沿岸部の巨大地震・津波災害の軽減に向けた総合的研究」。

Brazil



全7回で5,300人が集まる

若手の日系人が中核メンバーとなって、サンパウロ帰国研修員同窓会(ABJICA)、ブラジリア国費留学生同窓会(ABRAEX)、レシフェ帰国研修員同窓会(ANBEJ)などがウェビナーを実施。これからの時代の「もの作り」の考え方、経営力の強化の方法、ブラジル北部アマゾン地域にある日本人移民が開拓したトマスの観光開発などについて話し合った。これまでに7回実施され5,300人が参加。登壇者のひとり自身自身が経営する会社でマスクの生産を開始し、地域の日系団体やJICAのサポートを受けてさまざまな機関に寄付を行っている。

7月に開かれたウェビナーでは日本の「もの作り」について話し合われた。



高齢者ケアの分野でも 帰国研修員の主導でセミナーを実施

メキシコ日系帰国研修員同窓会(ASENIM)は、2015年からメキシコの高齢者支援を考えるセミナーを政府機関と共催。高齢者を定義する法律の改訂や高齢者向け融資の実現に貢献してきた。20年2月には地域に根付いた高齢者ケアをテーマに、日本で地域医療に携わる医師と研究者を講師に迎えてセミナーを実施。メキシコ国内のみならず国際機関などから約160人もの関係者が参加した。ASENIMの会長、川辺準さんは「コロナ禍で高齢者ケアの必要性・重要性が認識されています。彼らが社会的弱者とならないように日本の知見を共有したい」と話す。21年2月には高齢者ケアに関するウェビナーも開催予定だ。



2月に開かれたセミナーの様子。

Argentina



ネットワークで域内の生産性アップ!

企業の品質・生産性向上を推進する20の機関が中南米地域の15か国から加盟する「ラテンアメリカ生産性ネットワーク」が、2020年から本格的に動き出している。5月から20年末までに16回、経営管理や生産性向上に関わるウェビナー会議を2週間ごとに開催する予定だ。第8回までの合計参加登録実績は約2,550人。コロンビア、ウルグアイ、アルゼンチンの機関がおもに講義を担当し、国を超えた交流が見所になりそうだ。



上：ウェビナー実施を告知するチラシ。
下：ラテンアメリカ生産性ネットワークの初回会合に集まったメンバーたち。

Bolivia



国を超えてよりよい発展を

中南米には各国の帰国研修員同窓会が参加するラテンアメリカ帰国研修員同窓会連合(FELACBEJA)がある。ボリビア帰国研修員同窓会は、この同窓会連合のネットワークを生かして国境を超えたウェビナーを積極的に実施。ホンジュラスやコロンビアとの間ではJICA海外事務所の現地採用スタッフも交えた勉強会を行っている。中小規模農家に向けた日本の「カイゼン」*1の手法の提案や、日本が培ってきた土砂災害の防止技術「SABO(砂防)」の考察をはじめ、医療や障害者ケアなど多くの分野で学び合いが続いている。

*1 日本の高度経済成長期に、おもに製造業で品質や生産性を上げるために培われた理念や手法のこと。

小規模農家の発展を考えるウェビナーの告知画面。域内の帰国研修員が力を合わせる。



旅人・たかのてるこさんの 中南米★写真紀行

写真・キャプション●たかのてるこ

Let's go!

ジャマイカ×Music

Jamaica



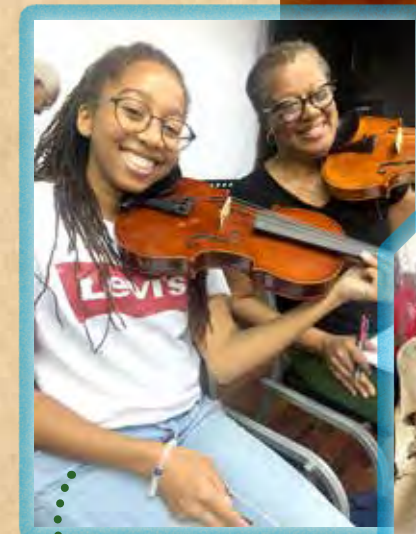
体にリズムが 流れている人々!

ジャマイカ音楽といえばレゲエがよく知られている。なかでも「ルーツ・レゲエ」と呼ばれるジャンルでは、政治的なメッセージ性の強いものが多い。経済は、観光業のほか鉱業、アメリカ等に移住した市民からの本国送金や、砂糖、バナナ等の伝統的製品の輸出によって支えられている。JICAは防災・環境と格差是正を重点課題として協力している。

私は介護職をしているんだけど、年配の人のおしゃべりも楽しくて仕事は好きよ。人生、楽しまなげ!



Dance!



市民参加の楽団でバイオリンを弾く仲良し親子。「まだまだ下手だけど、練習は楽しいわ〜」。



博物館の庭で太鼓の練習をする子どもたち。天性のリズム感がハンパなく、カッコよくてほれぼれ!



火山近くのタバコン温泉は世界的にも大人気のリゾートスパ。森林浴をしつつ、温泉が流れる川や滝壺での癒しは、温泉好きにはたまらないパラダイス。

地球の広報・旅人・エッセイスト
たかのてるこさん

70か国を駆ける旅人。「ガンジス河でバタフライ」は「旅のバイブル」として支持され話題に。大学の教職の悩みから生まれた本『生きるって、なに?』がロコミで14万部となり大反響! シリーズ第3弾『笑って、バイバイ!』が10月4日に発売予定。

ウェブサイト www.takanoteruko.com



深い森の木々の間に渡されたワイヤーを超高速で移動するジップライン。圧倒的な疾走感で、気分は鳥人間!

青年海外協力隊員
環境教育を広める 野村 圭さん

新聞社で記者をしていた圭さんは、隊員になる夢をかなえてコスタリカへ! 生ごみ減量になるコンポスト作りを家庭に広める支援で活動中。「やりがいがあって毎日充実してます!」。

「見ると幸せになれる」といわれ、世界一美しいとも形容される鳥、ケツァールの写真をおすそ分け♪

同僚で親友になった
ファビオラさん



「羽ばたく宝石」とも称されるハチドリ
のキュートなこと! レース編みの
ようなかわいい巣でつづらぎ中...

コスタリカ×Nature

Costa Rica



自然豊かな観光大国!

コスタリカは国土の約25パーセントが国立公園、生物、陸生および海洋保護区となっており、世界遺産には自然遺産が3件、文化遺産が1件登録されている。中南米の国々の中では比較的治安がよく、一人当たりのGDPも高い。JICAでは野生生物保護区の住民参加型管理プロジェクトなどを通して環境保護に協力してきている。

NYから観光で来たのだけど、鳥や動物のかわいらしさに、超感激♡

在任50年、旅行会社を営んでいる北條勝子です。コスタリカよとこ一度はおいで〜♪



人類学博物館で見た、古代アステカ人の世界観が伝わってくる「太陽の石」。中心にいる神のなんと荘厳で優美なこと!



中南米最大の古代都市遺跡、テオティワカンにある「太陽のピラミッド」。目の前にすると圧倒的な迫力で、古代にタイムスリップしたような気持ちに!

メキシコ×Art

Mexico



これが「文化」の強さ!

35件もの世界遺産があり、マヤ文明の遺跡や植民地時代の建造物など多様な文化が入り交じるメキシコは、民族的にもヨーロッパからの移民や先住民などさまざまな人々が暮らす。包摂国家*の実現、経済的繁栄、グローバル社会での責任などを重点分野として掲げており、JICAは産業振興、三角協力/南南協力を力を入れている。

*幅広い層の国民が経済成長の恩恵を受けることができ、貧困削減や格差是正を実現した国家のこと。

Hello!

超キュートなメキシコのマリア様。極彩色の色使い、ゆるキャラ的な描き方、自由すぎてサイコー!



グアテマラでは30年ほど前まで内戦が続いていて、なかでもネバフ市を含む周辺地域はもっとも被害があった場所といわれています。市川さんは「過去の悲劇を乗り越えて地域を復興させたい」という市の教育事務所からの強い要請を受けて赴任し、活動を通じて知り合った現地の教員たちからとても信頼されていました。



企画調査員(ボランティア事業)*
丸田隆弘(また・たかひろ)

*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査して要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。

+one information

土地の特色が織り込まれた民族衣装

みなさんは「グアテマラの民族衣装」と聞いて、どういうものを想像しますか？ マヤ文明の痕跡が色濃く残るグアテマラでは、マヤ人(マヤ系先住民)が多く住んでいます。彼らが長い間守り、引き継いできた民族衣装がすごいのです！

マヤ人の日常着である民族衣装は、マヤ文化において重要な意味を持つ赤、黄色、黒、白、緑(青)の5色を基本とした色使いと独特なデザインが特徴的です。地域ごとにオリジナルのデザインがあり、民族衣装を見ればその人が住んでいる地域がわかるほどです。土地の特色を表わす色が使われていたり、自然や宇宙のモチーフが取り入れられたりと実にさまざま。生地素材も各地域の気候に合わせて工夫されています。町中で堂々と民族衣装を着こなす女性たちを目にするたびに、民族と故郷に対する誇りを感じました。

美しいデザインは、おもにウィピル(貫頭衣)に施されます。かなり繊細な部分も含めてすべて手織りで作られているのだから驚きです。手が込んでいるものほど価値は上がり、ウィピルは高価なものだとされています。グアテマラの平均月収は日本円で3~4万円といわれているのですが、私が住んでいたネバフ市のものは色鮮やかでデザインも細かいため1着約1万5,000円もの値段がついていました。マヤ人にとって民族衣装は財産でもあるのです。

さまざまな土地の特色が織り込まれたグアテマラの民族衣装——いつかこの国を訪れた際は、ぜひ注目してみてください！ (市川あかね)



イラスト ● さかがわ成美



みんな、
わかりましたか？

模擬授業を行う市川さん。教員はこの様子を見て授業の進め方を学ぶ。



教員に板書の仕方を教えてよりよい授業にしていけることを目指す。



実際のグアテマティカの教科書(右)とグアテマティカを使って算数の授業を受ける子どもたち。

ることも次第に増え、教員一人ひとりの変化を実感。最終的にほとんどの教員がグアテマティカを使って授業を進められるようになりました。「この方法を続けていきたい。教えてくれてありがとう」と言ってもらえたときはうれしくて涙が出そうになりました。現地で初となる小学校教育隊員だったためおたがいに戸惑うことも多かったのですが、彼らの優しさについて私が支えてもらっていきました。今回の隊員活動の経験を生かして、これからも新しいことに挑戦していきたいです。

その後、指導書に沿った授業がグアテマティカを使った授業を行えるようにするための活動を始めた。そのひとつがモデル校の巡回です。各学校で算数の授業を観察し、進め方に関するアドバイスをしたり、授業で出された問題を子どもたちと一緒に解いて、つまづく部分を把握したりしました。私が先生になって授業を行い、その様子を教員に見てもらって模擬授業をすることも。また教員に向けた研修会を月に1度実施し、授業内容に差がないよう指導書の活用方法や知恵も共有しました。教育に関する相談や質問を受け



JICA海外協力隊
がゆく Vol. 23

算数教材「グアテマティカ」を普及させるため教員指導に力を注いだ隊員をご紹介します。

構成 ● 坪根育美

in グアテマラ
市川あかね

いちかわ・あかね
出身地: 愛知県 職種: 小学校教育
任期: 2018年6月~2020年6月



首都: グアテマラシティ
グアテマラ

毎日が挑戦でしたが、
現地の方の優しさに
助けられました



昔から抱いていた「海外で活動する」という夢をかなえるために、大学で取得した教員免許を生かせる海外協力隊に応募しました。私が赴任したのは、グアテマラのネバフ市。約7時間かけて首都から長距離バスを乗り継ぎ、いくつもの谷を越えてたどり着きます。そ

こで地域の小学校で使われる算数教材「グアテマティカ」の普及と教員指導に関する活動をしました。グアテマティカは同国で初となる算数の国定教科書で、日本も技術協力で貢献しています。

通常は一定の質を確保した授業が行えるように、授業の手順などが載る教員に向けた指導書を使用します。ですが指導書自体は作られていたものの赴任したばかりの頃、学校には一冊もない状態。そこでまず、配属先のキチエ県教育事務所の職員と市役所に行って指導書を印刷するための費用援助をお願いしました。その結果市内のモデル校5校の教員全員に指導書を配付することができました。

映像教材で紹介された ルワンダの水事情



自宅近くにある公共の水くみ場。日本の子どもたちは、自宅に水道がないことに驚く。



10分かけて水くみ場まで歩く村落部の子どもたち。

「ルワンダ×水」をもっと知りたい方
「3分で学ぶ世界」もあります！

ほかの途上国の現状や課題、解決への取り組み、現場での体験なども。JICA海外協力隊が等身大目線で3分以内で紹介しています。



【コチラから】



(リンクは2021年3月末まで)

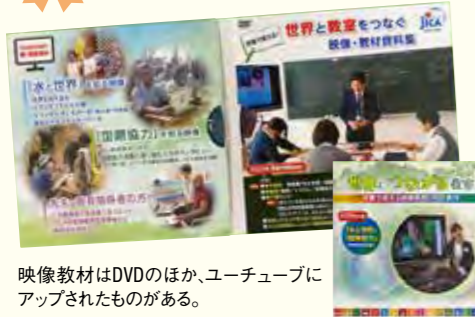
水をめぐる世界の現状と 国際協力について学ぼう！

JICAでは教育現場で活用できるように、途上国で培ってきた知見や経験を通して世界の現状や課題、国際協力について紹介する冊子教材と映像教材を作成している。水をテーマにした「水と世界」「国際協力」もその一つだ。

「水は世界の誰にとっても必要不可欠なもので、国境を越えて世界をめぐらる大切な資源です。日本に暮らす私たちにとって、水は蛇口をひねれば出てくる当たり前の存在ですが、世界は必ずしもそうではありません。アフリカのルワンダの現状を通して、水がとても貴重な現実を子どもたちに学んでもらうことが教材のねらいです。また教材は、予備知識がなくてもわかるように作られており、途上国へ行ったことのない先生も活用できます」とJICA地球ひろばの村上稔嗣さんは話す。

地球規模で考える水の循環、ルワンダの紹介とその国で暮らす子ども一日、海洋プラスチックごみなど、水をめぐる課題や水環境分野で国際協力活動に取り組む人々などを複数の映像にまとめている。映像は複数本に分けられているので、授業の目的に合わせて選ぶことができる。子どもたちが身近な水をきっかけに世界の課題を「じぶんごと」として考えられる授業や、国際協力の取り組みから多文化共生へと意識を高める授業など、いろいろな切り口がある。子どもたちが世界に向き合い、自分を見つめ直すヒントになるはずだ。

消費者教育教材資料表彰2020 優秀賞を受賞



映像教材はDVDのほか、YouTubeにアップされたものがある。



JICA地球ひろば
村上稔嗣
(むらかみ・じょうじ)さん

授業で使えるショート映像集は コチラから！



JICAの教材を活用したい方は コチラから！



世界「国際協力」の映像教材を使った講座を受け持った。近藤さんは16年の教師海外研修でエチオピアを訪れ、以後継続的に国際理解・開発教育を実践している。今年からJICA中部・開発教育ナビゲーター*2となり、中部地方での開発教育の推進に努めている。「夏休みでも外に行けない子どもたちに向けて、世界の課題やSDGsについて興味を持ってほしい」と思い引き受けました」と近藤さん。講座ではSDGsを通して世界の課題を知ろうという呼びかけから始め、映像教材を活用して地球上の水の循環やルワンダの

現状を説明した。「国際協力やSDGsについて何も知らない子どもたちが、テーマを身近なものとしてとらえ、学ぶことがおもしろいと感じてもらうためには、現場や関わっている人々の声を届けることが最適です」と映像の力を感じている近藤さん。子どもたちの興味をぐっとつかめるため、他のテーマのJICAの映像教材も学校の授業で活用している。とくに低学年の子どもたちには効果的だと感じている。映像教材をはじめとするJICAの教材を開発教育・国際理解教育の実践に役立ててほしい。

*2 開発教育の推進と、JICA開発教育支援事業の情報発信を行う。開発教育の裾野拡大を目的にJICA中部に設置した制度。

世界につながる教室⑫

映像の力で、興味を引き出す

授業で使える映像教材 ～「水と世界」「国際協力」～

JICAでは、学校での国際理解・開発教育に活用できる多数の教材を作成・提供している。2020年3月には水をテーマにした「水と世界」「国際協力」の映像教材が加わった。実際に授業などで活用したお二人の先生に話をお聞きした。

地元テレビ局の番組で SDGsについて講義



津島市立東小学校 教諭
近藤勝士(こんどう・かつし)さん

番組でSDGsについて講義を行う。

ルワンダと リモートでつなぐ



上：ルワンダのJICA事務所とインターネットでつなぎ現地の様子を学ぶ。
下：映像教材でルワンダの水事情について学ぶ児童たち。



奈良市立都祁小学校 教諭
中陽佑(なか・ようすけ)さん

学校で国際理解・開発教育を実践している先生が、「便利」「使いやすい」と活用しているのが、ウェブサイトに「JICA地球ひろば」からアクセスできる教材だ。なかでも映像教材は人気が高く、コロナ禍の中でオンライン授業の増加にもないアクセス数が伸びている。国際協力・SDGs、難民、イスラム、教育というテーマの映像教材に加え、新たに水をテーマにした映像教材が完成し、活用できるところになった。

映像のリアリティで現地を知る

奈良市立都祁小学校で英語を教える中陽佑さんは、2019年、JICAの教師海外研修でルワンダを訪れた。同国でJICAの水分野の協力で活動している方の話をうかがい、灌漑施設の建設現場を訪ねた。その経験を生かして4、5、6年生の外国語の時間(全11時間)で水をテーマに授業を行った。

授業の導入部分で、水の循環やルワンダの国紹介、ルワンダの子ども一日を取り上げた映像教材を見せた。「子どもたちは映像に興味津々でとても集中して見ていました。現地の人々の表情なども伝わり、ルワンダの風景や暮らしをリアルに受け取ることができたと思います」と中さんは映像教材の利点を話す。「水と世界」「国際

学ばおもしろさを 映像教材で伝える

愛知県津島市では、コロナ禍の中で自宅での時間が増えた地域の子どもたちに向けて、地元のテレビ局が「夏休みの自由研究講座」という番組を作ることになった。地域の人や小・中学校の先生が、それぞれ夏休みの自由研究の参考になる授業を行うもので、津島市立東小学校の教諭、近藤勝士さんは、SDGsをテーマに「水と世

協力」の教材では複数の内容が用意されているので、授業の意図に沿ったものを選ぶことができ、使い勝手もよかったという。映像を活用した授業を経て、JICAのルワンダ事務所とインターネットでつないだ2時間の授業を実施。子どもたちは映像を見て感じた疑問点について、現地から水事情を学んだ。「子どもたちは水について、じぶんごと」としてとらえられるようになりました。最後にまとめたイメージマップ(キーとなる単語からイメージされる言葉をどんどんつないで図式化するもの)や授業の振り返りはとても内容が充実していて、彼らの視野が広がったことを感じました」と、中さんは授業の手応えを感じていた。

*1 国際理解・開発教育に関心を持つ教職員を対象に国内・海外の研修を行い、帰国後、経験を生かした授業実践の取り組みを支援するJICAの事業。



Republic of Uzbekistan

EARTH GALLERY Vol.145 [ウズベキスタン共和国]

地球ギャラリー
写真文・鈴木革(写真家)

多くの歴史的建造物を擁する、世界遺産に指定された都市サマルカンド。
美しい彩色タイルの霊廟が並ぶシャーヒ・ズインダ廟群は人気の観光地で、11世紀から造られた20以上の建物が並ぶ。

歴史ある“若者の国”



郊外ではヒツジやヤギを追う大陸的な遊牧風景に出会う。スルハンダリア州の山岳地帯。



遠方にアフガニスタン国境の Амダリア川が見えている。豊かな穀倉地帯だが厳しい監視下に置かれている。テルメズ近郊にて。



街道沿いの地元運転手らが立ち寄るローカルレストラン。少しいかつい感じだが、皆穏やかな人々だった。カシュカダリア州の山間部にて。



上写真と同じく国境の遺跡カンブルテバ。アレクサンドロス大王の渡河地点とされ、遺跡修復の日干レンガを作っていた。



サマルカンドの中心、レギスタン広場のウルクベク・マドラサ(イスラム教の学院)。新婚の妻たち専用という美しい衣装が映える。



夏は結婚シーズン。世界遺産を背景に、大事な記念写真を撮るカップルがあちこちで目につく。プハラのタキ・サラフォンにて。



人々はパーティが大好きで、高級レストランではよくパーティを見かける。爆音、ダンス、カラフルな照明、すべてに圧倒される。サマルカンドにて。



サマルカンドの台所、ショブバザール。あらゆるものが屋内、屋外に山積みになっていて、目にも鮮やか。



ウズベキスタンではバザールのことをタキといい、直射日光を避けるために天井を覆った美しい商店街がある。世界遺産の都市プハラのタキ・サルガロン。

中央アジアという地域の歴史はたいへん古く、紀元前にさかのぼる。ウズベキスタンに加えてカザフスタン、トルクメニスタン、キルギス、タジキスタンをまとめて西トルキスタンと呼び、隣接する中国側の東トルキスタンと区別している。トルキスタンとは「トルコ人の住地」という意味で、西トルキスタンでは紀元前から活躍したイラン系のソグド人の地^{＊1}に、6世紀ごろテュルク系遊牧民の突厥^{トウルク}が侵入してテュルク化が始まった。8世紀にはアラブ勢力の侵入によってイスラム教化され、10世紀のイスラム王朝下で文芸や学問が発達して中央アジア文明の下地ができた。さらに13世紀にモンゴルの支配を受け、14世紀にはその末裔といわれるティムールが登場し、古都サマルカンドを中心に世界帝国を築き上げた。

地勢的に西トルキスタンは北部の草原地帯と、東のバミール高原から西流する大河がつくる南部のオアシス地帯に分けられる。北部草原では騎馬遊牧民が勇猛に疾走して、南部オアシスでは華麗な都市文明が発展した。ウズベキスタンはこの古代オアシス都市国家の中心地であり、サマルカンドやブカラ、ヒヴァ、コーカンドなど「シルクロードの華」ともいえる歴史的な町を擁している。

一方で、ウズベキスタンという国はきわめて「新しい国」でもある。西トルキスタンの5か国はソビエト連邦が自治区

分として画定した境界がもとになり、1991年のソ連邦解体によってそれぞれ独立して新しい国家になったのである。ロシア支配より以前は都市国家が群雄割拠して、ときに争いながらも、近似する言語や文化を共有する一塊の文明圏であつた。

あらためて地図を俯瞰すると、内陸国に囲まれたウズベキスタンは二重内陸国と呼ばれている。つまり外洋と2カ国以上を隔てた国のことで、それは世界に2カ国しか存在しない。ちなみにもう1カ国はヨーロッパの小さな公国リヒテンシュタインだが、ウズベキスタンは外洋までのルートがいずれも数千キロメートル以上の距離があり、世界で最も海から遠い国といえる。むろん空路は世界各地と結ばれているが、それは人間や軽量物資の輸送に限られ、重量物はやはり陸海運に頼ることになる。世界の重量基準での物資輸送は97パーセントが海運といわれるが、おのずとウズベキスタンの貿易相手国は隣国をはじめロシアや中国、トルコなど地続きの国が大きな割合を占める。だが陸運にしてもいくつもの国境を跨ぐことになり、コストは經由国の数だけ膨らむ。くわえて不安なことは、經由国の政治リスクだ。現在近隣国との関係はおおむね良好だが、問題がないわけではない。たとえば水資源である。降雨の少ない中央アジアでは、先述の西流する

内陸河川が主要な水源であるが、アラル海の砂漠化^{＊3}など大きな問題を抱えている。しかもこれらは国際河川として、河川自体が国境となつている場合もあり、また上流と下流の国の間で利害がつねに存在する。しかしながら久しぶりに訪れたウズベキスタンは、相変わらず明るく優しい国であつた。独立してから30年足らずで、国の人口が約2100万人から3380万人へと増えた。したがって年齢構成でも、55歳未満の人口比が86パーセントと圧倒的に若い国なのである。町には子どもや若者が溢れ、活気のある様子に国としてのエネルギーを感じる。おりしも訪れた夏季は結婚シーズンで、有名な世界遺産の美しい街並みを背景に、あちらこちらで新婚カップルがドレス姿で記念写真を撮っていた。なんだか、経済指標のGDPなどの数字とは無縁に、数値化できない豊かさや幸せがあるよううで、少しうらやましい気持ちになつてしまった。



左：子どもたちは人懐っこい。世界遺産をバックに素敵なポーズ。ブハラにて。中：名物メロンの季節。街道には露店が並ぶ。その大きさに似つかわしくない濃厚な甘さは世界一とか。右：田舎の民家の中庭でつろぐおばあちゃんと孫たち。スルハント州。



サマルカンド、レジスタン広場のティラカリ・マドラサ(イスラム教の学院)。礼拝堂に入る婦人たち。経年変化なのか建物がゆがんでいるが、壮麗な装飾は衰えていない。

教えて! 外務省 / 知っておきたい 国際協力²⁵



33の国がある中南米地域。日本との関係や、開発協力について解説します。

今月のテーマ

中南米地域での開発協力

答えてくれた人



外務省 国別開発協力第二課 中南米班 課長補佐

黒田 なおみ (くろだ なおみ)さん

1994年外務省入省。在ドミニカ共和国大使館、在ペルー共和国大使館、国連代表部、広報文化組織、国際協力局などを経て2018年から現職。対中南米開発協力を担当。

Q₂ 具体的にはどんな協力を行っているの?

A₂ 国の発展段階に応じたきめ細かい協力を行っています。

中南米地域は国の発展段階もさまざまです。OECD(経済協力開発機構)が4年ごとに発表しているODA受け取り国リストによれば、同地域の貧困国から低所得国はハイチ、ニカラグア、ホンジュラス、ボリビア、エルサルバドルの5か国で、残る28国は中進国以上、うち6か国は同リスト卒業国です。

貧困国や低所得国での協力の中心は、無償資金協力や技術協力による基礎的な医療・保健や教育の環境整備と質の向上です。ハイチではユニセフ(国際連合児童基金)と連携したコレラ対策や、小・中学校の建設を実施。中米地域では算数・数学の能力向上への協力や、熱帯病の一種であるシャーガス病対策を行っています。

難民・移民も大きな課題です。中米の北部トライアングル(グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス)からの「移民キャラバン」(貧困や治安の悪さから逃れ、安定した衣食住を求めてアメリカを目指す中米の人たちが形成する遠征集団)の問題のほか、南米ではベネズエラにおける経済・社会情勢の悪化で、520万人*の難民・移民が近隣諸国に流出しました。こうした状況に対し、日本は複数の国

際機関と連携して、中米での移民流出防止や帰還移民の社会への再統合、ベネズエラの周辺国での一時保護体制強化や食料支援を行っています。

中進国以上の国への開発協力は、負担の少ない金利と条件での有償資金協力(円借款)や無償での技術協力が中心です。気候変動対策や再生可能エネルギー導入促進、上下水道整備、廃棄物処理などの協力がいくつかの国で行われています。パナマでは、環境に配慮した経済基盤整備として中南米初のモノレール整備の計画が決まっています。

また、これまでの日本との協力を通して経済的に力をつけてきた国々(チリ、アルゼンチン、メキシコ、ブラジルなど)をパートナーに、日本の知見を他の中南米地域へ普及させる「三角協力」も進んでいます。ブラジルで普及した日本の交番制度や、メキシコが導入した心臓カテーテルの治療技術が、その国を拠点に他国へ広がっています。日本と同様に地震や津波が多いチリは、長年行われてきた防災協力の知見を中南米地域に普及させる人材育成の拠点となっています。

* 2020年8月付の国連発表より。



上: コスタリカが円借款で建設した地熱発電所(建設中のタービン建屋と冷却塔)。同国の再生可能エネルギーによる電力供給が強化された。
下: パナマで円借款による建設が決まったモノレール(完成予想図)。パナマ首都圏の交通機能改善やCO₂排出削減への貢献が期待される。



ブラジルとの三角協力で交番制度が整備されたグアテマラ。警察官が高齢者を介助する場面も見られるようになった。



左: 日本の無償資金協力でハイチに建設された小学校。
右: エクアドルでは、国連世界食糧計画(WFP)とともにベネズエラ難民・移民への食糧援助に協力した。
© WFP/Ecuador Alexis Masciarelli

Q₃ 中南米地域での開発協力の重点課題は?

A₃ 防災と環境分野に重点を置き、各国のニーズに沿って多様な協力を実施します。



外務省の国別開発協力量針では、中南米の多くの国で防災と環境分野への協力を強化するとしています。太平洋沿岸諸国は地震や津波などの防災の必要性が高く、中米カリブ地域では毎年ハリケーンによる洪水や地滑りなどの被害が報告され、気候変動や自然災害への弱さを抱えています。また「地球の肺」と呼ばれるアマゾンの熱帯雨林の環境や生物多様性の保全、廃棄物処理など環境問題への協力要請も多数あります。また、所得水準の高い国でも依然として残

る所得格差の是正や、各国のSDGs達成への貢献も引き続き重要な課題です。特に今年は新型コロナウイルスの感染拡大で、医療・保健体制の強化が喫緊の課題となっています。ほかにも、都市交通機能や電力・道路などのインフラ整備、産業振興や雇用の創出、中小企業の生産性向上などによる経済の活性化など、まだまだ日本が中南米地域の発展に貢献できる分野は多く、中南米諸国との連携をこれからも強めていきます。

Q₁ 日本にとって中南米はどんな地域?

A₁ 経済的な可能性や国際社会での政策連携、日系社会との深いつながりがある重要な地域です。

中南米地域は、以下の三つの点から日本にとって重要な地域といえます。

一つは経済的な可能性です。域内の人口約6.4億人、GDP(国内総生産)約5兆ドル。鉱物資源が豊富で農業生産性も高く、日本にとって資源や食料の安定供給地です。日本が開発協力を行うことで地域の経済力が高まれば、貿易・投資の相手国としていっそう強い関係を築くことができます。

二つ目は、1国1票が原則の国際的な場では、33か国からなる中南米は大きな勢力だということです。しかも大半の国が民主主義や市場経済といった基本的価値を日本と共有しています。開発協力を通して地域の安定

や環境など地球規模課題への取り組みを続けることで、それらの課題を討論・決議する国連などの国際的な場で、政策面で連携できる日本の良好なパートナーとなりえます。

最後の理由は、友好な2国間関係が歴史的にも長く、親日国が多いこと。213万人規模の日系社会があることも、日本とのつながりを深めています。

ODA(政府開発援助)は、国益を追求するための重要な外交ツールです。開発協力により中南米地域の発展に貢献することは、日本との信頼関係や経済関係、国際社会での連携を強化することにつながります。

JICA 沖縄 (オンライン)

沖縄発の国際交流イベント 11月14日(土)、15日(日)



昨年のイベントの様様。

昨年の来場者数が6,000人を超えた沖縄の国際交流イベントを、今年はオンラインで開催する。沖縄と世界をつなぐ県内の国際協力・交流団体が参加し、SDGs関連イベントのライブ配信や、活動紹介のデジタルコンテンツ掲載を中心に実施する。なかなか旅行ができない今こそお薦めの、沖縄の魅力を感じられる2日間。

●おきなわ国際協力・交流フェスティバル2020
～SDGs沖縄発みんなの取り組み～
日時：2020年11月14日(土)、15日(日)
終日視聴可能
会場：オンライン上
参加費無料、事前予約による観覧者イベントも予定。
詳細はJICA 沖縄まで。



詳細はこちら

映画の最新情報

『パピチャ 未来へのランウェイ』

舞台は1990年代の“暗黒の10年”と呼ばれたアルジェリア内戦下。ファッションデザイナーになることを夢見る女子大学生の視点を通して、イスラム原理主義による女性弾圧の実態を描く。首都アルジェでは、ヒジャブの着用を強制するポスターがいたるところに貼りだされていた。従うことを拒む彼女は悲劇的な出来事きっかけに、自分たちの自由と未来のため、命がけてファッションショーを行うことを決意する——。監督自身の経験をもとに製作された物語は、昨年の第72回カンヌ国際映画祭でも称賛された。



© 2019 HIGH SEA PRODUCTION-THE INK CONNECTION-TAYDA FILM-SCOPE PICTURES-TRIBUS P FILMS-JOUR2FETE-CREAMINAL- CALESON-CADC

●『パピチャ 未来へのランウェイ』
2019年/フランス、アルジェリア、ベルギー、カタール/109分/
監督：ムニア・メドゥール
配給：クロックワークス
10月30日より、Bunkamura/ル・シネマ、ヒューマントラストシネマ有楽町ほか
順次公開。



詳細はこちら

本の最新情報

『この世界を知るための大事な質問』

写真家の野澤亘伸さんは20年以上にわたり日本ユニセフ協会の現地視察に同行し、世界の紛争地やスラム街などの貧困地域を撮影してきた。本書は、ブルキナファソやナイジェリアなどの8か国をメインに、野澤さんが撮影した写真と現地取材した子どもたちのエピソードをQ&A方式でわかりやすく

解説。ユニセフ・アジア親善大使のアグネス・チャンさんや、JICAのオフィシャルサポーターでもある高橋尚子さんなど、著名人のインタビューも掲載している。

●『この世界を知るための大事な質問』
野澤亘伸 著/宝島社 1,500円(税別)



読者プレゼント
詳細は p.38へ



『7年目のランドセル』

ランドセルは海を越えて、アフガニスタンで始まる新学期

日本の小学生が6年間大切に使用したランドセルを、戦禍によって教育の機会を奪われたアフガニスタンの子どもたちに贈る「ランドセルは海を越えて」の活動。2004年から始まったこの活動で、12万個以上のランドセルが贈られた。本書は、日本を旅立ってアフガニスタンの子どもたちと

“7年目”の新学期を迎えるランドセルのその後を、現地の状況や子どもたちの日々の暮らしとともに紹介する。

●『7年目のランドセル』
ランドセルは海を越えて、アフガニスタンで始まる新学期
写真・文：内堀タケシ/国土社 2,000円(税別)

『笑って、バイバイ!』

今月号22ページの特集に寄稿していただいた、たかのてるこさんの新刊が10月4日に発売される。一昨年、ひとりでも多くの人に読んでほしいと500円という低価格で出版した『生きるって、なに?』シリーズは累計14万部を超えた。その第3弾となる本作は、世界中の老若男女の笑顔の写真

に、いつかは誰にでも訪れる“死”を前向きにとらえたシンプルで文章が添えられている。大切な命と向き合い、自分らしく生きて人生を楽しむためのヒントが詰まった一冊。

●『笑って、バイバイ!』
文・写真：たかのてるこ/テルブックス 500円(税別)



読者プレゼント
詳細は p.38へ

JICA 東京 (オンライン)

誰もが楽しめるスポーツイベント



10月17日(土)

国籍や性別、障害の有無にかかわらず誰もが参加できるユニバーサルスポーツのオンラインイベントを開催する。専門家による障害者の暮らしやスポーツについての話、同日ラオスで開催される「ユニバーサルスポーツフェスティバル」と中継をつなぎ、参加者たちのインタビューなども聞くことができる。また画面上で顔の表情を使って行う遊びや、あっちむいてホイなどの参加型ゲームもあり、大人から子どもまで楽しめる内容となっている。

●バラ競技だけじゃない!
知って楽しもう!今だから繋がる!
リモートユニバーサルスポーツフェスティバル

日時：10月17日(土) 14:00~16:00
会場：オンライン上 (Zoom使用)
参加費無料、要事前申し込み。
詳細はJICA 東京まで。



申し込み、詳細はこちら

10月17日(土)~25日(日)

JICA 駒ヶ根 (オンライン)

世界とつながる6日間

●みなこいワールドフェスタ2020
会期：2020年10月17日(土)~25日(日)
期間中は終日視聴可能。
会場：オンライン上

参加費無料、公式ウェブサイトは10月17日公開予定。
詳細はJICA 駒ヶ根まで。



詳細はこちら



昨年のイベントの様様。

長野県には青年海外協力隊の訓練所と、青年海外協力協会 (JOCA) の本部があり、毎年「みなこいワールドフェスタ」を開催している。協力隊週間とも呼ばれるこの期間中は国際協力に関連したイベントを行っており、今年はオンライン上で配信される。「ひと・まち・せかいをつなぐ」をテーマに、世界の料理のレシピ動画や各国の写真のサイトをめぐるスタンプラリー、協力隊週間のこれまでの歴史、協力隊員による帰国後の活動内容の紹介など、さまざまな企画を用意している。

JICA 地球ひろば (オンライン)

SDGsに尽力する企業の話を知ろう

10月22日(木)

JICA 地球ひろばでは定期的にNGOや企業等の展示を行っており、10月からは大手総合スポーツ用品メーカー企業のアシックスを特集している。この展示に関連し、アシックスから講師を迎えてオンラインセミナーを開催する。スポーツにおけるサステナビリティとはなにかという基礎的な内容から、自社で行っているSDGsや環境に配慮した取り組み、環境とスポーツの密接な関係性などをわかりやすく紹介する。

●企業が取り組むSDGs、サステナビリティ
日時：2020年10月22日(木) 19:00~20:30
会場：オンライン上 (Zoom使用)
参加費無料、要事前申し込み。
詳細はJICA 地球ひろば
地球案内デスクまで。



11月11日(水)

JICA 埼玉デスク (オンライン)

SDGsの達成をみんなで! オンライン情報交換会

今回で3回目となる、JICA 東京と「埼玉NGOネットワーク」の交流イベントをオンラインで開催する。NGOやNPO、自治体、大学、企業等さまざまな組織や年齢、国籍を問わず集まり、それぞれが持つ力を生かした情報交換をしながら交流を深め、SDGsの達成に貢献することを目的としている。オンラインのため、埼玉県外からの参加も大歓迎だ。



前回のイベントの様様。

●埼玉県国際協力情報交換会2020オンライン
~世界と私たちが繋がるグローバルな社会課題(国際協力+多文化共生)とステークホルダーの学び・経験交流・連携の促進~

日時：2020年11月11日(水) 13:00~16:00
会場：オンライン上 (Zoom使用)
参加費無料、要事前申し込み。
詳細はJICA 埼玉デスクまで。



申し込み、詳細はこちら

読者の声



7月号「大学連携 未来のリーダーをつくる」を読んで

小学校教員をしており、今回の特集のような「人」を育てるテーマに興味があります。子どもたちに国際協力について教えられるよう研究をするなかで、『mundi』はとても参考になります。

(東京都 / 30代 / 女性)

「JICAカレンダー」のパレスチナ廃棄物処理がコロナ対策に生かされているという記事がとても興味深かったです。日本の衛生管理を学び自国でその知識や経験を生かすのはもちろん、今回のような非常時にも適切に対処されていることを知り、援助の効果は直接的なものにとどまらず広がっていくのだと感じました。教育支援もそうですが、人を育てるって素敵ですね。

(埼玉県 / 20代 / 女性)

8月号「企業連携×SDGs 2030へ行動で挑む」を読んで

各企業のSDGsに対しての取り組みや成果がよくわかりました。このような情報を得ることができなかったので非常に興味深かったです。また今回のような企業の特集してほしいです。

(香川県 / 30代 / 男性)

「地球ギャラリー」の南アフリカ共和国の記事を読んで、アパルトヘイト制度にあらためて興味を持ちました。政策はなくなっても社会や人々の生活は簡単には変わらない根深さを感じます。映画や書籍で学び直したいと思いました。

(東京都 / 30代 / 女性)

学校で毎年JICAエッセイコンテストに取り組んでいます。『mundi』では月号プロローグを楽しみにしていますが、今号の「前へ! 前へ! 前へ!」は特に感動しました。学校で扱っている「スタディサプリ」にはこんな人たちが携わっていたんですね。

(広島県 / 60代 / 男性)

《アンケートのお願い》

プレゼント付き

[2020年10月号のプレゼント]

JICAや記事内容についてのご意見、ご感想をお待ちしております。また、こんな企画を実施してほしいなどのご希望もぜひお寄せください。お寄せくださった方の中から、抽選でプレゼントを差し上げます。下記項目をお書き添えのうえ、巻末のアンケートはがき、Eメール、またはファクスでお送りください。

●氏名 ●住所 ●電話番号 ●年齢 ●性別 (自由回答) ●職業 ●本誌を入手した場所 ●面白かった記事 ●本誌へのご意見・ご感想 ●JICAへのご意見・ご質問 ●ご希望のプレゼント番号

*お寄せくださったご意見・ご感想は、本誌やJICAのウェブサイトに掲載する場合があります。あらかじめご了承ください。ご記入いただいた個人情報は、プレゼントの発送および誌面の向上に役立てること以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

◎応募締め切り 2020年11月15日

①

書籍
『この世界を知るための
大事な質問』
野澤巨伸 著 / 宝島社
1名様



②

書籍
『7年目のランドセル
ランドセルは海を越えて、
アフガニスタンで始まる新学期』
写真・文:内堀タケシ / 国土社
1名様



③

書籍
『笑って、バイバイ!』
文・写真:たかのてるこ / テルブックス
1名様



mundi

OCTOBER 2020 No.85

編集・発行: 独立行政法人 国際協力機構
Japan International Cooperation Agency (JICA)
〒102-8012 東京都千代田区二番町 5-25
二番町センタービル
Eメール: ML_JICAPR@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/>

制作協力: 株式会社 木楽舎
〒104-0044 東京都中央区明石町 11-15
ミキジ明石町ビル 6F 『mundi』編集部
TEL: 03-3524-9572 Eメール: ML_JICAPR@jica.go.jp

- アンケートの送付、定期送本、バックナンバーの取り寄せに関するお問い合わせは木楽舎までお寄せください。
- 本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



定期送本のご案内

●申し込み方法

巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送本期間・送付開始月号を明記のうえ、所定の金額(送料+手数料)を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送の手配をいたします。入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください。

*複数冊、またはバックナンバーをご希望の場合は送料が異なりますので『mundi』編集部(木楽舎)までお問い合わせください。

次号予告(2020年11月1日発行予定)

11月号 特集 人間の安全保障

人間の安全保障は、「誰一人取り残さない」世界の実現を目指すSDGsの基本にある概念で、日本はいち早くその重要性を国際社会に提唱してきました。コロナ禍で脆弱な立場に置かれる人が増える今、早急な実現が望まれています。特集ではJICAのこれまでの取り組みを通し、人間の安全保障とは何かを解説するとともに、その実現に向けた道筋を示します。



『mundi』バックナンバーはJICAのウェブサイトでもご覧になれます。

JICA mundi

検索

<https://www.jica.go.jp/publication/mundi>

アフリカでポリオの終息 20年以上の協力が実を結ぶ



子どもたちにポリオワクチンを投与するWHOの職員。

今年8月、WHO（世界保健機関）がアフリカでのポリオフリー（野生株のポリオがなくなった状態）を宣言した。アフリカで最後の流行国であったナイジェリアでは2016年を最後に新規感染が出ておらず、終息したと判断された。

ポリオ^{*1}は、おもに乳幼児が発症する感染症で、1940年代ごろには世界中で毎年50万人以上が感染。ワクチンの普及で患者は減少していたが、ナイジェリアでは特に北東部の治安の悪さや、宗教や文化の違いによりワクチンが忌避されていたことから対策が遅れていた。

JICAは2000年代からUNICEF（国連児童基金）、WHOなどの支援機関や、ビル&メリンダ・ゲイツ財団と連携して、ワクチンの調達や輸送保管を行う保冷箱や冷蔵庫などのコールドチェーン整備、また人材の育成などを行い、ナイジェリアのポリオフリーに向けた対策を長年支えてきた。

今回のWHOの宣言を受けて、祝賀イベントがオンラインで開かれ、ビル・ゲイツ氏自身も参加してポリオ根絶活動の支援者や従事者たちと達成の喜びを分かち合った。これにより、ポリオがまだ残っているのはアフガニスタンとパキスタンの2か国となった。

^{*1}ポリオ（急性灰白髄炎）は便を通して広がり、感染すると手足のまひなど後遺症が残ることがある。

ニュース深掘り! 試行錯誤の末に達成できた喜びと、次なる支援への思い

ポリオフリーに至るまで、資金やワクチン、人材などあらゆるものが不足するなど、多くの課題がありました。日本と現地地で連携しながら粘り強く進めてきました。2014年以降には、ナイジェリアの円借款^{*2}により調達したワクチンで予防接種キャンペーンを実施。この借款の枠組みでは、現地政府がキャンペーンを通じて一定のワクチン接種率を達成すると、ビル&メリンダ・ゲイツ財団が政府に代わり返済する仕組みを取り入れました。感染症対策のための官民連携としても革新的な事例だったと言えるでしょう。

国際社会が多方面から働きかけ、足並みをそろえて感染症に打ち勝つことを実感するとともに、ナイジェリアのブハリ大統領からJICA宛てに感謝状が贈られるなど、これまで多くの人たちで積み重ねた協力が実を結んだと確信しています。

ナイジェリアにはまだラッサ熱^{*3}などの感染症も流行しており、引き続き対策に力を入れています。今回のアフリカでのポリオフリーは、アフリカの子どもたちだけでなく、まだ発生が続く国や他の感染症、また全世界で流行している新型コロナウイルス感染症の対策従事者にも希望になると信じています。



アフリカ部 アフリカ第1課
内田 久美子^{さん}(右)
うちだ・くみこ
ナイジェリア事務所
奥村 真紀子^{さん}(左)
おくむら・まきこ

JICA HEADLINE NEWS

- 9月 2日 | ▶ **ブラジル 官民連携で省エネ基準改正を実現**
日本のエアコンメーカーがJICAと連携し、政府に働きかけた結果により実現。エネルギーや環境保全の課題に貢献。
- 9月 1日 | ▶ **モーリシャス 油流出事故に対する国際緊急援助隊・専門家チーム三次隊派遣**
同国沿岸で座礁した日本の貨物船事故に対し、8月19日に出発した二次隊に続き、支援活動。
- 9月 1日 | ▶ **インド 財政支援を通じ、新型コロナウイルス感染症危機対応に貢献**
インド全土での保健医療分野における緊急対応を支援し、新型コロナウイルスの拡大防止及び社会経済的影響の抑制・緩和を目指す。



◀◀ JICAのニュース&トピックスをもっと読みたい方はアクセス!
<https://www.jica.go.jp/information/index.html>



17.パートナーシップで目標を達成しよう



日本行きを夢見る、次世代を担う日系人の子どもたち。日本語学校の生徒と阿部さん(左から3人目)。

遠くて近い国

世界最大の日系社会を持つブラジルでは、今も日本の言語や文化を次世代へ伝えようと奮闘する人たちがいるが、その存在を知る日本人はそう多くないと思う。

私はJICA海外協力隊としてブラジルの日本語学校で日系人の子どもたちに日本語を教えていた。現地に滞在中、日系人から「日本を第二の故郷と思ひ文化や言葉をつないできた。世代が進むにつれ日本に対する関心が薄れてきている。もっと日系人として誇りが持てるよう、日本を身近に感じたいし、日本人にも日系人の存在を知ってもらいたい」といった言葉を何度も聞いた。

帰国後、日本の人々に日系社会の様子や考えを知ってもらおうと、日本語学校の生徒による絵の展示や、日系人の暮らしぶりについての講演会を開いた。来場者からは「現地で日本文化が継承されていることをうれしく思うと同時に、自国を見つめ直すいい機会になった」と、関心を寄せる言葉が多く寄せられた。また、「日系社会を見たい」と話してくれた大学生は、開催の翌年に渡伯して日系人と交流を深めている。

その後、来場者の声を現地に伝えると、4世の若者は「日本が近くに感じた。早く日本に行ってみたい」と目を輝かせ、ある2世は「これを機にブラジルに関心を持ってもらえたらうれしい」と言ってくれた。

微力ではあるが、今後も両国が近くなるきっかけづくりに取り組みたい。

今月の投稿(文と写真)阿部善江さん

南米からの日系人研修生たちとの出合いをきっかけに日系社会に興味を持ち、JICA海外協力隊に参加。2018年6月までブラジルのモシダスクレーゼ市で日系日本語学校の教師として活動した。

SDGsとは



持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)は「誰一人取り残さない」をスローガンに、格差や貧困、環境破壊など世界が直面している問題の根本的な解決を目指す17分野の国際目標。

あなたの投稿をお待ちしています!

「わたくしが見つけたSDGs」に写真と文章をお寄せください。貧困や気候変動、格差ほか、いま世界が直面している課題やその解決に向けた取り組みのエピソードなど、SDGsの17の目標を身近に感じられる作品をお寄せください。

応募要項:写真1点(ご自身が撮影されたもの)、文字原稿400字以内。

*写真内の被写体に関する肖像権およびその他の権利は、投稿者の責任において被写体や権利保持者の承諾を得るなど必要な措置をとったうえでご応募ください。

ご応募・お問い合わせ先▶ML_JICAPR@jica.go.jp(「mundi」編集部宛て)

持続可能な開発目標(SDGs)と
JICAの取り組み

